
傀儡と傀儡子

馬耳東風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傀儡と傀儡子

【Nコード】

N7417X

【作者名】

馬耳東風

【あらすじ】

日本の歴史上、最も劇的な逆転劇となった本能寺の変。明智光秀を突き動かしたのは何なのか。何故、信長は光秀を読みきれなかったのか。そして、三日天下と言われたあっけない光秀の最期の謎は、本能寺の変を驚天動地の角度で描く、歴史のIF。

時は今

天正十年六月二日未明。暗闇の中、京の桂川に差し掛かる一団があった。彼らを指揮するのは、明智日向守光秀。織田信長を頂点とする、織田家で最も権勢を誇り、信長の信頼を勝ち得た男である。彼は、信長の命で、中国攻めを行う羽柴筑前守秀吉の援軍に向かう道中であつた。今、この瞬間までは……。

軍を率いる光秀は、馬上で体を揺らしながら、暗い夜道の先を見据えている。家臣の者達は、光秀の様子を見て、

「殿は、今も頭の中で、中国攻めでの立ち振る舞いを考えておられるのだな」

と、思っていた。お館様、つまり信長の今度の命令は、中国地方に展開し、強大な勢力を持つ毛利を攻める羽柴筑前守秀吉の支援である。ほぼ勝ち戦でありながら援軍を求めるなど、秀吉の考えそんなことだと言うことは家臣たちでもわかることだった。

秀吉は、光秀と同格とも言える勢力を持つ出世頭である。彼は出自は百姓と言っているが、本当の身分すら定かではないところから、城持ち大名にまで出世する彼の才覚は並みではないどころか常識外れであつた。彼の才覚は、人の心を察することの巧さにある。周りにいる人間すべての考えを察し、何を望むか、何を欲するかを嗅ぎ取り、それを実現することで手柄と信頼を獲得し、のし上がってきた。その手腕は、光秀ですら、

「あの人たらしには、頭が下がる。あやつの才覚は、城だけでなく、自分より格が上の者すら引き込んで手中に入れてしまう不思議なものだ。そして、あの眼の輝きを見たものは皆引き込まれる。このわしですらな」

と、恐れ入ったと言う表情で苦笑いしながら家臣に話すほどだった。

今度の援軍要請も、あまりに大きな手柄を独占すると、成り上がり者の自分が家臣団の間で図抜けることで反感を買っばかりか、絶対的な支配を好む信長の感に触ると言っしたたかな読みがあった。それを知っている家臣団は、半ば白けていると同時に、勝ち戦に乗じて領地を拡大することを考えていた。恐らく殿もまた同じことを考えていると信じ切っていた。秀吉に負けぬ力量と才覚があるからこそ、織田家家臣の中で信頼と地位を勝ち得てきたのだ。そして、それくらいの読みとしたたかさはもちあわせているのが明智光秀なのだ。

光秀に率いられた軍勢は深夜の行軍を続けながら、街道を進んでいた。このまま順調に行軍を続ければ、羽柴軍に合流するのも遅くならず済む。そのような中で進んでいる時だった。

馬に乗って行軍していた光秀が、突然手綱を引いて馬を止め、「皆の者、止まれ」

と、静かに命令を下した。主の命は絶対だ。家臣たちは、後続の兵に立ち止まるよう命令を伝えていく。真意を理解しかねた重臣の明智秀満が、停止命令を出した光秀にどのような理由なのか問いかけてみた。

「殿。何故このような所で馬を止めるのです。夜間の移動ゆえ、早めに休息をとる場所に辿り着かねば、羽柴殿との合流が遅れます」

秀満と共に、同じく明智家の重臣である斎藤利光もまた、光秀の命令に疑問を持っていた。

「殿、早く馬を進めませんか、足輕達にも動揺が広がります。いかががされたのですか」

二人の問いに、光秀は一向に応えようとせず、見ようもしない。そして、新月の空を見上げると、深いため息について二人の方を振り返った。そこにはいつもの明智光秀の顔があるのだが、どこか表

情や目つきが本来の彼と違うことに、長年仕えた家臣も気がつけなかった。じつと二人を見つめた光秀は、ゆつくりと口を開き、言葉を発した。静かだが、確かな口調で。

「そなたら、わしのために死ぬ覚悟はあるか」

光秀の思いもかけぬ問いに、利光や秀満は驚きはしたが、それは常日頃から心に決めてあることなので、答えに躊躇はなく、もちろんだという答えを返した。それを聞いた光秀は力なく笑うと、

「そうか。お主たちも、そしてわしに率いられるこの軍の者は、わしに、この明智日向守光秀に命を預けられる、いや、くれるてやると思うのだな。……、すまぬな」

と、慈しみ深い表情を見せた。何故、このような時にこのようなことを殿は言うのか、さっぱり理解できない家臣は、あっけに取られていた。そんな彼らに、光秀は確かな口調で命令を下した。

「これより我らは東に向かう」

家臣たちは驚愕した。一刻も早く西の中国に向かわなければいけない時に、何ゆえに京に軍を向けな変えればならないのか。軍が遅れ、さらに京の都に我々がいれば、主君信長公は何と思われるか。信長公は何と思われるか……。信長……。利光と秀満の脳裏に、恐ろしい考えが浮かんた。東に向かえば京都。そこには信長公がいる。宿泊するのは本能寺。堀や防壁などを築かれているとはいえ、ほぼ丸腰に近い状態の手勢。彼らは、光秀の考えていることを理解しつつあった。

光秀は彼らの顔を一瞥し、彼らが口にしなくてもその意を察し、自分の言葉を待っていることを理解した。ゆつくりとうなずくと彼は、静かに、はっきりとした口調で宣言した。

「我らはこれより東に向かい、京へ戻る。足軽にはまだ伝えるでない。彼らは、それほど忠義が強くない故、怖気づく者も出るであろ

う。事の次第は、その時までお主達と一部の者以外に知らせるな。敵は、敵は本能寺にあり」

予想していたとはいえ、あまりにも恐ろしい主君の発言に、家臣は言葉を詰まらせ、顔面は蒼白になっていた。信長の苛烈さは度を超えており、この事が知られる様なことになったり、事が失敗した後は死より恐ろしい仕打ちが待っていることは、織田家に仕える明智の家臣であれば恐怖を伴ってわかっていることだった。胆冷やして思考停止に陥っている家臣を見つめながら、光秀はあくまで冷静に、淡々と己の心の内を打ち明けていく。その顔には表情はなく、まるで能面が口を利用しているようである。

「お主たちが肝を冷やすのも無理はない。お館様は、自分に手向かう者や牙をむく者に対しては、一切の情けはかけず、鬼となってこれらを征伐する。神仏を恐れぬあのお方にとつて、人の道を外れることに後ろめたさはない。白か黒か、その二つのみ。灰色をこの世に認めぬのだ。故に、我らの行いは決して許さず、怒髪天を突きながら襲いかかるであろう」

光秀は、淡々と信長の恐ろしさを口にしていく。それは家臣たちもわかつていいる事ではあるが、光秀落ち着いて口にするほど、恐怖に体が固まるしかなかった。利光は無駄かもしれないとも、光秀に今一度そこに考えを改めてもらうことを願う気持ちで、真意を問いたした。まさに、地獄への分かれ道に達っている心境だった。

「それほどまでにお館様の恐ろしさをわかっていながら、何故にこのような謀反を企てるのですか」

はつきりと光秀の考えを謀反と断じた家臣に対し、光秀は怒るでもなくただ淡々と答えるのみであった。その表情は、能面のように無表情で、人の物と思えなかった。

「これは謀反にあらず。お館様は、いつのころからか人の道を外れ、

人であることをやめてしまわれた。神仏をないがしろにし、城の石垣に墓石を使う始末。僧侶であろうと一切容赦せず、寺を焼き払う所業。一向宗とあらば、女子供と容赦はせず、平気で屍の山を築く。挙句の果てには、朝廷に対しても恭順の意を捨て、帝に対してもはや敬意を持つては居らぬ。朝廷の臣下ではないものが兵力を誇示するがため、京で馬揃えを行うなど、危険極まりない恫喝である。お館様は、第六天魔王などのたもつておる。それはその所業を見れば、わしも同意する。だが、第六天魔王は天上にあるからこそ、魔王たりえる。この世における魔王など、鬼畜の如きもの。我らは、織田信長と言つ人の体に巢食う魔物を天に帰す者と思え。謀反にあらず。これは天が命ずるもの。お館様の魂を天に送るとともに、魔からこの世から救うものと思え」

光秀の圧倒的な演説は、家臣たちの恐怖を取り払い、魂をも引き寄せるほどの力を持っていた。謀反の原因など、古今東西に溢れかえっている。それは、謀反の原因を相手を貶め、己の正義を作るための物。しかし、光秀の言葉は、あまりに荒唐無稽でありながら、信長の非道を的確に指摘し、誰もが言いだせず、心の奥底に押しこめていたものを代弁していた。忠義と共に存在する恐怖支配への不満。それを光秀は的確に言葉にし、また謀反ではなく、あまりにも人の道を働く外道と言つてもいい信長の行為を止めると言う、恨みではなく、ある意味最後の信長への忠義すら感じさせるものであった。あの信長に、今の行動を止めさせるには、もはや死しかない。主君である光秀の思いを受け止め、これから自分達の起こす行動に整合性を求めるには、この考えしかなかった。時はもうない。恐怖支配から逃れるには、今夜を置いて好機はない。日頃から、心の片隅にあつた信長への懐疑心が加わり、家臣達はついに決断した。「わかり申した。これが野望にあらず、真に殿の先ほどの言葉道理だとするなら、我らの命、殿に差し上げましょう」

家臣の決断を聞き届けた光秀は、わずかに頭を下げ、その心意気に感謝の意思を伝えた。主が頭を下げるなど、ありえない事であった。

「お主たちの決意、感謝するぞ。今宵は新月、闇にまぎれて行動するにはまたとない。見よ、天も我らに味方しておる。夜が明けぬうちに、本能寺を包囲せよ。この数で囲み攻めれば、必ずやうまくいくであろう」

「はっ」

家臣たちは、後続の部隊に指令を飛ばしに馬を走らせた。もう後戻りはできない。本能寺へ向けて、一本道を行く行軍が始まった。

その時、光秀の顔を見る者は誰もいなかった。もしも、一人でも彼の顔を見ていれば、歴史は大きく変わっていただろう。馬の腹を蹴り、自らも移動を始めた光秀の瞳が、一瞬だけ銀色に輝いた。そして、その口から彼の声であるが、その声の主が他の誰かの様な言葉が口から洩れていたが、一人としてその声が入る者はいなかった。

「明智殿、すまぬ。だが、この好機を逃すわけにはいかぬのだ。今しばらく、この命を貸して下され……」

是非に及ばず

明智軍は、それまでとは違つゝ調で移動を開始した。新月の暗闇を味方につけるには、夜の内に異動を完了し、今日に入らなければならぬ。それが叶えば、悟られ巢に本能寺を包囲できる。寺とは言え、堀などを巡らせた城塞の構造を持つ本能寺だ、数が多いとはいえ、それを決定的なものにするには、完全包囲を完成させ、相手の防御を無に帰さなければならぬ。それが完了して、初めてこの作戦は成功する。京には信長だけでなく、嫡男の信忠もいる。最大の目標は信長なれど、信忠に勘付かれると好機はしぼんでしまう。何としても、電光石火の勢いで本能寺を包囲することが必要であった。

「秀満、足輕どもには、何と命令が行き渡っている」

「さすがに信長公を討つなどと申せば、動揺が走りまする故、相手は徳川殿と伝えております。何しろ、この軍には織田家の兵も居ります故」

「なかなかやるの。徳川殿は恭順はしているが、あくまで大名。我らと違い一家臣ではない。野心はあつて当然であるがため、武田と結ぶという話もあったほどだ。さらに嫡男と正室をお館様の命で死に至らしめている。よく耐えているものだともつぱらの噂だ。内心では恨みを抱いていても不思議ではない徳川殿を討てとお館様が命じて、むしろそれは当然の成り行きとも言える。徳川殿も、今は丸腰同然だからな」

「ですが、本能寺に近づきますと、さすがに感づくでしょう。間際になって騒がねばよいですが」

「秀満、お前も心の内では臆しているのであらう。だがな、人と言うものは追い込まれると不思議な考えを起こす。道理ではない、獣の如き習性で己が生き残る道を選ぶ。獣の感と言うものは、忠義や理屈を超えておる。故に人は、瀬戸際ではその習性に従い、道を選ぶ。この手勢で本能寺に向かえば、己が生き残る道は、頭で考えなくともわかる。丸腰同然の本能寺に駆け込むか、我らと共に本能寺を囲むか。生きるか死ぬかの瀬戸際にいる足軽は、なおのこと獣に近づき、その感性が示す方に向く。お主も、その恐れは京に着くころには消え失せよう」

光秀の的を得た人の習性への考えに秀満は、心の中で唸るしかなかった。五十五年の生涯の間に幾多の出会い、命のやり取りが行われる戦、丁々発止の政事の裏舞台、そして名君と暴君の二つの顔を持つ織田信長のもとで生きてきた体験が、人の心まで操り見抜くと言う技を身につけたのだらう。感服し頭を下げた秀満は、光秀の目に宿る銀色の目の光に気がついていない。

夜明けが近づき、空が少しずつ青みがかってきた京の都。その京の四条西洞院、油小路、六角、錦小路にいたる広大な土地に、今にも迫りくる明智軍が目指す本能寺がある。そして、この本能寺に、この戦国の世を龍の如き勢いで昇ってゆき、今や天下すらその手中に収めようとする織田信長が逗留している。武田を滅ぼし、上杉を封じ込め、長宗我部に圧力を与え、毛利を追い詰めた彼の勢力は、もはやその完成形を築き上げたと言って過言ではなかった。周りに敵なし、奢りでも油断でもなく現実にそれを成し遂げてしまった彼は、まさに霸王とも言える。しかし、それほどの圧倒的な強さを誇る彼であったが、その器の大きさは裏腹に、家臣に対する苛烈さは口で表すことのできない、心の底から湧きあがる根源的な恐ろし

さを備えていた。

光秀の指摘したように、神仏に対する姿勢は、この時代ならば、いや、現代においても目を引くような異様な行為と言えるものである。それを躊躇いもせずに発想し、口にして、部下に命令を下す。科学の発達が進んでおらず、理屈ではなく観念が思考を左右される時代において、宗教と言うのは非常に大きな場を心の中に占め、物事の決断を大きく左右する。それほど大切なものを壊せ、殺せと言うのは、己の心を破壊するに等しいのだ。心の拠り所を自分自身の手で傷つける行為を家臣たちは、自分の納得のいく理由で心を補い、信長の命に従うしか生きる道はなかった。

観念でものを考える民と比べると、信長は理屈、つまり論理で物事を決めていく。これがよいという判断を下せば、その道にある思想や観念は全く気にしない。実をとるためには名は必要ない。権威も必要ない。必要なのは、そこにある物、目に見える確かな物しかありえないだ。そのような異物感を放つ信長が、他と違う存在感を大きくする度に、周りは戸惑い、反発するが、他者と根本から違う信長にとっては、敵とは思考から違う故に、形式を伴う戦いが成立しない。信長にとって戦いとは、自分の道にあるものでしかないだから、取り除くだけと言う考えがある。だから、手段を選ばず相手を滅ぼし、容赦もせず、信じがたい作戦すら可能にする。まさに、戦乱の世を一つにまとめるために時代が必要とした異端である。

その信長も眠っている時は、一人の壮年の男に過ぎない。この男が見る世界、そして口から発せられる言葉。それが世を動かすとともに、世の中の何かを破壊していくなど、信じがたいものである。静かな寝息を立てながら深い眠りの中にいた信長だったが、突然目を見開いた。信長ともあろう者が悪夢にうなされ、寝具を跳ねのけ飛び起きることは考え難い。しかし、先程まで眠っていた人間とは思えないほどに目は爛々と輝き、眠気などは一切感じさせない。信長は音もなく寝具から抜け出すと、部屋の隅に行くと桐の箱を引っ張り出し、中から茶器を取り出し、それを恍惚とした表情で見つめ

ていた。その顔は、家臣に恐怖を与える男とは同一人物とは思えないほどの変わりようで、一種の病的とも思えるとりつかれたような表情を浮かべている。

「美しい……」

普段、家臣や家中の者に対して見えることのない恍惚とした表情、甘い口調は、魅入られている人間そのものである。

茶器狂い、今の見方で言えばそうであろうが、当時の価値は一国一城に相当するものであった。そして、茶器にそれほどまでの価値を付与したのが、まさに信長であった。

元々信長は茶の湯に興味があつたが、リアリストであつた彼が、当初から芸術的価値に入れ込んだとは思えない。むしろ、そこに集まる人間から情報を交換し合う、一種のサロンとして考えていたのだろう。しかし、それなりの家柄に育つた者には、本物を見抜く目さらにはいかに現実主義者とは言え、物に宿る無形の魅力や価値に気がつくものである。程なく、信長も茶の湯の持つ魅力と価値、そして茶器の値打ちに気がついた。そして、それは上洛した時に大きな炎となつて燃え上がった。

茶室に集まる人々は、政治の中枢に関わる者、物流を一手に握り富を築く商人など、世の中を動かす地位にいる人物のなんと多いことか。そして、そこで飛び交う情報がどれだけ高度なものかを、信長は天性の才覚で見抜き、これを掌握することの重要性を認識した。まず、茶の湯のブランド化、ステータス化に手をつけ始めた。茶の湯接待の主権を家臣に許可制にして与えた。当然関心は高まる上、取り上げられると一層したくなるのが人間の性。こうして、茶の湯はさらに洗練され、価値を高めていく。そして、そこで使用される茶道具の価値も高騰する。次第に、それは道具としてではなく、芸術性と言う目に見えぬ付加価値を際限なく上げていき、国よりも茶器を欲しがる武将まで現れる始末であつた。信長は、如何に

自分の勢力が拡大していても、家臣が論功を上げるほど、自分と与えられる土地がなくなるのを予期していたのだろう。武士は地位と土地を得ることを求めて主君に仕え、戦に邁進する。その価値観を壊し、物質的なものではなく目に見えぬ無形の価値を論功にするという画期的な発想を生み、それを現実の物にした。

しかし、自分で構築した新たな価値観に信長自身が飲み込まれるのには、それほど時間がかからなかった。名物狩りと呼ばれ、天下の名器ありと聞けばすぐに使いを出し交渉するのだが、相手にしてみれば断ればどのような結末が待っているかは、信長の性格を考えれば火を見るより明らかである。形ばかりの話し合いで、信長は欲しいものは強引に手に入れていった。行きつくところまでいくと、三大名器を揃えようと松永久秀にその一つを譲るように言ったが、彼は茶器に火薬を詰め爆死するという前代未聞の顛末を迎えている。このように、茶器に取りつかれたのは事実だが、茶器の価値を高めたことにより、茶器の收拾が天下を掌握することにもつながっていったのである。

信長は、まだ世も明けぬ内から、持ち込んでいた茶器を取り出し見入っているのである。自分の権力の象徴、そして物欲の権化であるそれを見つめる様は、やはり異様と言えば異様である。権威を恐れぬものが、無形の価値や美にとり憑かれているのは、矛盾を抱え奇妙であった。

「美しい。こうやって日に一度は眺めぬと、落ち着かぬわ」

自らのコレクションを眺め、恍惚とした表情で満足感に浸ると、精気を得たという様子で再び茶具を慎重な手つきでしまい込み、厳重に保管した。何年も前から、朝になり目を覚ますとこうやって鬼気迫る様子で包みを開け、うっとりとした様子で茶器を眺め、目覚めたときは打って変った生き生きとした様子で茶器をしまい込むという、人知れぬ習慣が信長の日課となっていた。

まさに、一日の始まりに体の中に魂を吹き込まれたかのようになった信長は、早朝から快活な動きを始めた。まだ、寺は静まり返っているが、すっかり目が覚めた信長は用を足そうと廁へ向かった。霧が濃く、六月だが少し肌寒さを感じる外の空気であった。廊下の外れにある川やまであと少しと迫ったところで、後ろから誰かが廊下を走る、騒々しい足音がした。この早い時分から何事だと癪に障った信長は、どなりつけようかと思ったが、それを制するが如く矢のような声が耳に飛び込んだ。

「殿、お伏せ下さい」

家臣の鬼気迫る声に、信長おただ事ではない何かを感じ、言葉に従って身を伏せようとした瞬間、肩に衝撃が走り、壁に叩きつけられてしまった。そして、すぐに鋭い痛みが走り肩口を見ると、長い矢が肩口に深々と刺さっていた。さすがの信長も、いきなり早朝に矢を射かけられるという情う今日を飲み込めずにいたが、本能寺の自分が逗留していることなど、京にいる者や家臣も知っていることだ。そこに矢を射かけてくる者となると……。

そこに、他の家臣が駆けこんできた。信長は、湧きを抱えられて部屋の中に引きずり込まれていた。追い討ちをかけられるのを恐れてのことだ。矢を抜き取られると生温かい血が流れるのを感じたが、信長は眉一本動かさず手当てを受けていた。そこに駆け込んだ家臣が、息を切らせながら膝をつき報告をする。

「お館様、一大事にございます」

「わしに矢を射かけるなど、確かに尋常ではないな。して、如何したのじゃ」

「寺のまわりを尋常ではない兵が囲んでおります。霧に隠れてすべては見ませぬが、百、二百ではありません」

「容易ではない事態だな」

現実主義である信長にしてみれば、この事態を悲観するという概念はない。自分に弓引く者が包囲している、ただそれだけのことである。そして、その事態に自分がどう立ちまわるか、それしか考えない。

「泊っているものをすべて叩き起こせ。この寺には、弓、刀なども貯蔵してある。全く手の打ちようがないわけではない。まず、敵が誰かを調べよ」

「はっ」

寝静まっていた寺がにわかにあわただしくなり始める。それと共に寺の周辺も騒ぎだしてきた。信長は五十を目前に最大の難関を迎えようとしていた。それをが超えられる難関かどうかは、まだわからない。家臣達は弓や刀を持ち運び、出来る限りの武装を始める。信長も、大弓を携え、床には刀や槍を突き刺し、臨戦態勢を整えていく。

そこに外の様子を探っていた家臣が戻ってきた。その顔面蒼白な湯オスは、粗さなる悪い知らせがあることを如実に物語っている。

「お館様、一大事です」

「それはわかっておる。このバカげたことを企てたのはどこの誰かが知りたい」

「それが、……、外にたなびく旗は桔梗の紋。……、明智様でございます」

「光秀だと。……、あ奴、二万の軍を率い、わしは京に丸腰同然で本能寺を宿をとることを知って、引き返してきたな」

「お館様、まだ、完全に囲まれたわけではありません。女衆にまぎれて逃げることもできます」

「光秀が、そのような逃げ道を作るはずはない。わしは、誰よりもあの者の頭も胆力も知っておる。知っていて、このような有様とはな。だが、相手が光秀なればこそ、もはや勝ち目はない。是非に及ばず。わしに勝ちはないのだ。逃げたいものは逃げて構わぬ。後は、死に方の問題じゃ」

「お館様……」

「泣くしかできぬなら、目の前から去れ。犬死にするよりなら生きる道もある。わしは、辱めを受けて生きるくらいなら、織田信長らしい死を迎えよう」

信長はそう言い、一旦寺の中に去っていった。もうすぐ、明智軍は圧倒的な兵力で攻め入って来る。勝ち目は全くない。家臣たちの前では覚悟を決めたように見えた信長の顔絵だったが、奥に引き下がり周りに人がいなくなると、口元を歪ませ、別人のような表情と声を上げた。そう、あの茶器に見入っていたあの時と同じように。「光秀、か。あ奴の心は読めなかったな。こしやくな真似をしてくれる。だが、これしきの事で死なぬ。そして、捕まらぬ。まだ、こちらには打つ手がある……」

まるで、信長ではない何者かが信長の声と口を使って喋っている。そうとは思えなかった。そして、その目は金色に不気味に輝いている。

人間五十年

本能寺をほぼ包囲しつつある明智軍。光秀はその光景を見つめながら、矢継ぎ早に指示を飛ばしている。

「包囲はほぼ済んでいるなら、すぐに攻め立てよ。矢を射かけ、門を突破して境内になだれ込め。逃げる暇を与えてはならぬ。逃せば、我らに命運はなくなる。決して、容赦はするな。生き残りたくば、ひたすら前へ押し寄せろ」

光秀の指示は、家臣を通じて、末端の兵まで伝わり、やがて鉄砲の音が鳴り響き、矢を弾く弓の音がそこかしこから聞こえてくる。静まり返っていた夜明け前の本能寺は、一転して戦場の真ただ中、修羅場と化した。時の声があちこちから上がり、兵たちは怒号をあげながら寺に殺到する。彼らの心を支配するのは、命のやり取りが行われる場で生き残るための闘争心と、信長に対する拭いきれない恐怖心を払うためだ。いくら数の上では絶対的な有利を誇るとはいえ、仕留め損なえばその怒りは自分達を襲い、地獄へ叩き込まれる恐怖心がこの期に及んでも拭いきれないのだ。怖気づきそうな己を奮い立たせるためにも、兵は声を張り上げ、死に物狂いで驍進していく。

寺では、兵から侵入しようとする兵を、信長や家臣たちが弓矢で攻撃し、侵入を阻もうとしている。ほとんどの者が、万を超える兵に包囲されると言う状況に冷静さを失い、手には汗が浮かび震えが止まらず、見当違いの方向に矢が飛んだり、汗で滑って引きが足りずに的に届かない矢もあった。そんな中で、信長の佇まいは見事というか、鬼神、或は不動明王の様に堂々たる構えを崩さず、大弓を構えては的確に矢を放っていく。矢は相手の急所を捉え、命を奪つ

ていく。矢を放つほどに精度を上げていき、次第に塀を乗り越えようとすると足輕の眉間に次々と命中させていく様は、もはや助かる道などないという状況を忘れ去るほど人間離れした光景である。信長の表情は、地獄への道連れにどれだけの数を引き連れてやるうかと言つ、まさに魔王の顔である。

とうとう門を破り、寺に殺到する塀にも、信長は容赦なく矢を射かける。まるで、人ではなくただ的に向かって矢を射るように、一切の躊躇がなく無表情のまま敵の頭を射抜いていく。しかし、信長が余りにも弓を引き絞って矢を放つため、ついに弦が切れてしまった。信長はそれに全く動じることなく、床に突き刺しておいた槍を手にとると、殺到する兵達を次々と突いていく。やはり、まったく躊躇はなく、狙いに寸分の狂いもなく、相手の喉元には突き刺していく。まるで、人を相手にしているのではなく、わらでできた的を射ぬき、稽古でもしているかのように。

槍の斬れ味が悪くなれば、それを投げ捨て、新しい槍で再び寺の中に侵入しようとする兵を突き殺していく。是非もないと言覚悟を決めながら、凄まじい抵抗を試みるのは、飼犬に手を噛まれると言う後世の笑い者になる様な死に方ではなく、魔王信長にふさわしい死に様を自ら構成し演出しようとして試みているのではないだろうか。それほどまでに、人間業とは思えない猛攻である。

やがて刀が尽きれば、今度は刀を手にする。ギリギリまで接近する兵にきりかかり、相手の腕や首を切り捨て、鎧兜ごと叩き斬る様な豪剣であつた。普段は政務に関わり、刀を抜く機会などなくなっている男のものとは思えない剣豪ぶりを見せつける。しかし、刀も永遠の切れ味を持つわけではない。切れ味が鈍り、致命傷ではなくとも体中に傷を負っていく。抵抗もはやこれまで、いや、十分に織田信長の恐ろしさ、苛烈さをこの兵士どもの心に刻みつけた満足感なのか、極限の状況でありながら醒めきった表情をしている。

「蘭丸、来い」

信長は、身の回りの世話をさせている小姓の森蘭丸を連れて寺の奥へと入った。蘭丸は、信長の糸はもうわかつている。身近に仕えているからという理由以前に、この状況で武將がとる行動と言え、もう考えるまでもない。

「蘭丸、寺に火をかけよ」

抵抗ももはやこれまで、首も光秀にはくれてやらん。信長の意をそう汲み取った蘭丸は、

「……、はっ」

と、言葉少なに命令に従い、信長が奥の間に入るとふすまを占め、他の物に銘じて油を撒き、火を放った。木造の寺ゆえに、火はあっという間に広まり、明智軍にも寺に火がかけられているのが見えるはずだ。

信長は、奥の間にある自分の部屋に辿り着くと、太刀を投げ捨て、障子の向こう側が炎で照らし出されるのをじっと見ていた。覚悟を決め、武士らしい最期を遂げようかと思われた信長だったが、意外な行動を見せた。

「ぐあああ」

まるで人とは思えない様な雄叫びをあげ、壁を殴り蹴りつけ、障子を破り、辺り構わず当たり散らす。先程までの覚悟を決めた男の姿はそこにはない。そして、ぶつぶつと低い声で呟いている。

「確かにこうなっては是非もない。だが、光秀めの謀反が読めなかったのは不覚だ……。あ奴、まさか……。そうか、そういうことか。あ奴の策謀か。ふっ、これで織田信長は終わりと誰しもが思うだろうが、それこそが狙いよ。まだ打つ手はあるぞ。まだ、死ねぬわしは死なぬぞ」

不気味なつぶやきを放つ信長は、黄金の瞳の輝きを放ちながら、

何かを持ち出し、寺のさらに内部へを移っていった。

明智軍の本陣では、にわかごしらえの陣の真ん中に光秀が座り、次々と寄せられてくる報告に対し、指示を飛ばしている。斎藤利光もまた、光秀の前に駆けつけ、状況を伝える。

「殿、本能寺に火の手が上がりました」

「そうか。恐らく、お館様は、わしに首だけは渡したくはないと言う意地があるのだろう」

「そうでしょうか。もしかしたら、女御にまぎれて脱出すると言う事もありえますが」

「誇り高いお館様に限ってないとは思いますが、無きにしも非ずだ。寺から出る者は、明智の者以外すぐに捕らえ、身分を明らかにしろ。お前はお館様の顔を見知っている。確認は任せる、行け」

「はっ」

利光は命令を受け、陣を後にしようとした瞬間、光秀は利光を止め、些細な事を頼んだ。

「利光、待て」

「何でしょうか、殿」

「行く前に、その辺りに居る者は誰でもよいから、ここに水を持ってくるように伝えよ。ふっ、わしも怖じ気づきそうになったか、喉が渴いて仕方がなく、喉が痛くなってきた。大將がこれでは情けないな」

「はは、仕方ありません。この利光など、小便が出そうでございます」

「小便か。そのような思いもここを落とせば収まる。気は抜くな」

「わかり申した。水の事は、近くにいた足軽に伝えましょう」

「うむ。人手を惜しむな。本能寺とにかく押し込め。そして首をあげるのだ。証がなくなれば、この後の身の振り方も変わってくる」

利光は光秀の指摘に相槌をうちながら、その場を後にした。一人残った光秀は無言で地面を見つめ、物思いにふけている。そこに利光に命じられたのであろう、一人の足軽が光秀の前に竹筒に入れた水を持ってやってきた。足軽は普段目にかかる事のない光秀との一対一での対面の恐縮してしまい、やや離れたところにひれ伏している。光秀は笑いながら、

「そこにおつて、どうすればわしが水を呑めると言っただけじゃ。近う寄れ、構わぬ」

「……、ははっ」

足軽は恐る恐る近寄り、光秀に竹筒を渡した。光秀は、それを受け取り水を飲み干し喉を飲み干した。そして竹筒を返そうとしたが、足軽は顔を伏せたまま手だけ差し出す。

「そこまで恐れずともよい。不作法があつたとしても、わしとお主しかいないのだから、誰も咎める者もおらぬ。顔をあげよ」

「はは、恐れ入ります」

足輕は恐る恐る顔をあげ、光秀と顔をがあった。と、思ったその時、彼の顔に光秀の口から水が吹きつけられた。

しばらくすると、光秀の居る場のその幕の間からあの足輕が這い出てきた。しかし、彼の醸し出す雰囲気は全く違っている。おどおどした様子は全くなく、寧ろ威厳に満ち溢れている。そして、その手には何故か光秀の太刀が握られている。そして最も変わっていたのは、彼の眼が銀色に輝いている事であった。

覚悟を決めたはずの信長であつたが、その目は未だ生に執着している。自室に戻ると、自身が寝ていた布団を破き、そこに何やらを放り込み包み込む。そして、息を切らせながら火がまわっている廊下から何か大きなものを運び込む。それは、一人の女だつた。どうやら氣を失っているらしく、ぐったりと横たわっている。信長は、その女の体の上に覆いかぶさり、自分の顔を女の顔に近づけていく。炎に包まれたこの状況で、異常な行動であるが、誰もそれを目撃する者はいない。ゆっくりと異様な時間が流れていたその時、後ろから、

「それまでだ」

と言う声が聞こえた。人がいるなどありえない状況の中での呼び掛けに、信長は眼を見開いて跳ね起き、刀をとって、相手の正体を確かめようとする。しかし、相手も姿を隠すつもりなどさらさらないらしく、燃え盛る障子を蹴り飛ばして寝室に入り込んだ。その人物は、あの光秀に水を運び込んだ足輕であつた。あのへりくだった態度は消え失せ、天下人目前である織田信長と対等の目線で堂々とした態度を保っている。

「何者だ」

信長は狼狽し憔悴しきりながらも、尚も自身の威厳を保とうとし

ているが、もはやその目は血走り、生々しい人間の本性が剥き出しになっている。一方の足軽は、冷静な態度を保ち、次第にその体が大きく見える様な錯覚に陥りそうだ。

「何者だと。名など意味はない。体を持たぬ我らにしてみればな」

「体を持たぬだと……。まさか、貴様」

「わしが近くにいる事を気がつかぬほど、お前は霸道に、いや魔道に酔っていたようだな、金閣とでも言おうか。この世の人々に倣って」

「ならば、お主は銀閣か。この星に落ちて以来、まさかまた巡り会うとはな」

「一時は完全に見失い、諦めはしたが、お主の臭いは決して消えなかった。だから、今こうしてお主の目の前にいる」

彼らは人ではない。人の姿は器、つまり傀儡として扱う存在だ。ならば、一体いかなる存在か。人はそれを幽鬼と呼び、物の怪と叫び、狐や鬼と蔑む。それは未知の存在だからだ。ならば、彼らもそう言う類という事ができる。なぜなら彼らはこの世に生まれたものではない。人の生きる現の外より来た未知の者、宇宙より来た者だから。なれば、安土桃山時代と言われる事になるこの時代においては、物の怪の類いと変わらぬ存在だ。だが、その姿が変わっている。彼らに肉体系しい肉体はない。というより、この世に降り立った時にその体をなくしてしまった。生きとし生きるもの、生きていく上で、好む場所はそれぞれ異なる。人は屋敷の中に暮らす。獣は山の中で暮らす。魚は水の中で暮らす。鳥は空をかける。虫は土の中や物陰に隠れて暮らす。お天道様を嫌う者すらいる。だから、金閣

や銀閣のような存在がいようと、さして驚く事でも珍しい事でもない。

彼らが好む所、それは空気の濃い所、つまり気圧の高い世界であった。何の因果か、彼らはこの世界に落ちてきた。しかし、不幸な事にこの世界は彼らの体を拒絶してしまった。彼らにとつて低すぎるこの星の気圧により、彼らの体は持ちこたえる事ができず、肉体が崩壊してしまった。しかし、生への飽くなき執念か、或はこの世の不思議か、またあるいは神仏の気まぐれであつたのか、彼らは生き残る事が出来た。それは体をほぼ九割方水の様にして溶解するこゝとで、肉体を持たずとも魂をこの世に留める事が出来た。しかし、水は日照りの中ではあつという間に消え失せる。そうなつてしまえば、今度こそ彼らの命はない。そこで、彼らは日よけを求め、人の体に入り込んだ。人の体にも水はある。そこに混ざり込めば、器となつた人間と一心同体になる事が出来るからだ。

そして、不思議なことに、ただかりそめの宿と思つていたその体を、自分の思い通りに動かせるようになってきた。彼らの体は人の脳に入り込めたおかげで、宿の主の心をも操つてしまう事がわかつた。だが、彼らとて、彼らなりの倫理や道德と言つた観念は持ち合わせている。宿の主の魂を奪うような真似はしてはならぬと、コミユニケーションをとる以外の干渉はしてはならぬという掟ができた。宿をとつている仲間は、目を見れば若つた。金色、銀色、青、茶、赤、黒、様々な色に変わる。他の人々と違う色を見つければ、それで仲間の事がわかつてしまう。そんな生活が続けることで生きながらえていた彼らだが、悪人というもののはどの世界に人びとの間でも生まれてしまうのが摩訶不思議なものである。

その者が犯したのは、最初は盗人であつた。食料から始まり、金、宝石、そんなものを盗んでいた。しかし、とうとう人殺しを働いてしまった。人様の星で、しかも人の体を借りて生きていながら、厚かましすぎるその所業に同族達は怒り、その咎人を追い始めた。しかし、九割が水である本来の体は、いとも簡単に他人に乗り移つて

しまった。そして、海を超えて東の国へ逃げたということ以外、手がかりがわからなくなってしまった。その海を超えた悪党が金閣であり、彼を追って捕らえに、或は成敗しに来たのが銀閣であった。「久しぶりだな、金閣。お主がゴアを抜け出す際に、宣教師と共に東の海へ渡ったと聞いて、わしがお主を追ってきたのだ」

「しつこい奴だ……」

「我らは、この星に住まわせてもらう身。そう、この国の人の言葉で言えば客人。その立場を笠にきて、人の魂を食らい、あまつさえその体に乗っ取り、悪行三昧をふるうなど、まさに外道の所業」

「黙れ。人ではない我らに、外道も何もないわ。しかし、よくこの信長という男に入り込んだ事がわかったものよ」

「まずこの国に来るのに苦労した。だが、お前がゴアを発った後に、同じ場所へ向かう人物がいてな。フロイスという方であった。あの方も宣教師であったが、夢の中で語りかけたわしの声を聞いてくださり、共に海を渡ってください。このわしを神の御使いと言って下さった」

「水の体しか持たぬ貴様を神の使いとは笑わせるわ」

「お主のその傍若無人な考えが、わしに気がつかせたのだ。フロイス殿の目を通して、この国の世情を知ることができた。物欲や征服欲の強いお主の事、必ずそれが表面化するはず。そして己の欲を満たすためにはそれ相應の権力者に近づくはずだと思つてな。そして目をつけたのが織田信長という人物だった」

「ほう。なかなか鋭い奴だ。だが、どうやって見抜いた」

「フロイス殿の目と耳を借り、織田信長という人間の評判を聞いたのだ。この国で未だかつてない人物であった。既存の価値観にとらわれず、平気で破壊する異端者。伝統や権威を尊び、その下で自立した社会を築く社会を否定し、すべてを己の許に集約する、わしはそのような予感を抱いた。わしがそう思えば、お主とてそう思ったはずだ」

銀閣は欲に流されず、人の体や目や耳を借りながら、その心理を学んできた。そして、人とは比べものにならないほど長い時を生きてきた経験と重ねることで、人の本質を見抜く眼力を養う事が出来た。それ故に、信長が持つ伝統や前例にとらわれぬ価値観を持つ面と、恐れるものがない故に禁忌を平然と破る凶暴性が並立する。それは、金格と同じ存在であることを意味し、互いに重なり合う存在である彼らが惹かれあうのは必然と言え、銀閣は金閣が信長を器に選んだことを確信したのである。

「確証は得られずとも確信は持っていた。フロイス殿の使命もあり、信長殿との謁見が叶うこととなった。お主は、器になった人間の事など一切配慮しない故、平然と表に出てくる。金色の瞳とその態度や言動で、わしは察した。その場で討ち捨てようかと思っただ、フロイス殿は血で汚してはならないお方であった故、その場は見逃すしかなかった」

「あの時に貴様と会っていたとは気付かなんだ。だが、ここまで来るには随分と時を要したな。策でも練っていたか」

「お主と出会った以上、これ以上フロイス殿を器に使うわけにはいかなかったわしは、この国の侍と言うものを学ばなければ、この国の霸王である織田信長に接近し、お主を確実に仕留める方法はない

と考えた。策を持たずに近寄れば、お主に勘付かれ、信長殿に仕えていると信じている家臣に打ち捨てられるのは目に見えている。どうしても、一対一になる場が必要だった。だから、侍と言う生き物を学ぶことにしたのだ。だが学ぶほどに、織田信長とお主の行動、どちらが狂っているのかわからなくなつた」

二人ん周りは、完全に炎と煙に包まれ、もはや脱出できる経路は廊下一本である。しかし、そこを通るには、お互いにどちらか一方を打ち捨てねばならない。そんな極限の中でも、二人の間に漂う空気に一数の乱れもない。

「ほう。何に狂気をみた」

「この国の侍と言うものは形式や格、そして権威と言うものを大事にする。如何に能力がある者であってもこの権威の力を借りぬ事には天下は取れぬ。そのような国の中で、信長と言う御仁は権威を破壊し、この国が積み重ねてきた形式に揺さぶりをかけると言う異形の男。わしはそこに狂気を感じた。そして、お主はいつ信長殿に入り込んだのかは知らぬ。だが、茶器狂い言う所業に、わしはお主の影を見た」

「なるほど、鋭いな」

「茶の湯と言うものはわしには理解できぬ。信長殿は恐らく情報を集めたり、価値を付属することで通貨や国の値打ちに引き上げ、家臣や大名を操ろうとした。そこは天才の故であろう。だが、お主の茶器狂いは度を越していた。国一つ滅ぼさんとし、そのような土くれの焼き物のために人を死に追いやる。そこが狂つておる」

「土塊とは無礼な。貴様に何がわかると言つのだっ」

信長、いや、金閣のあまりの剣幕に、銀閣は意外を感じ、驚いてしまった。決して余裕を崩そうとしなかった金閣が、初めて感情を露わにした瞬間であった。

「土塊とは無礼先晩。この形、色、質感、重み、そしてここに漂う魂、これを理解できぬお前など、下郎に過ぎぬ」

「理解できぬな。少なくとも今のわたしには。たかが土塊のために多くの命を殺め、人生を狂わせ、国すら滅ぼしかねない妄想など、理解しようとも思わん」

金閣は歪んではいるものの、芸術を理解してしまった。しかし、元が外道故に常軌を逸した偏愛を示し、現に生きる者の道理を無視した。銀閣は、芸術を理解できぬある意味では唯物史観である。人でない故、致し方のないことである。だが、人の心情や道徳を受け入れ、学ぶ度量は持ち合わせていた。人徳を持ち合わせていた者の体を借りた事が幸いしたのだ。

人を理解せずに喰らい、ねじ曲がった世界に足を踏み入れた金閣。人を理解し、尊重することで学び続けた銀閣。人の世に紛れ込んだ二つの人ならざる者達は、ここに至り、同族でありながら決して交わることのない道に完全に分かれたのだ。そして、それを悟ったかのように、二人は太刀を鞘から抜きはなした。同族という存在、その最後のつながりを断ち切るために。

「もはや、話し合う価値はなし。ここで成敗してくれる」

「よからう。この炎の中だ。水である我らの体はひとたまりもない。生きて出られるのは一人のみ。行くぞ、金閣」

二人はついに刀を交えた。体を操られる傀儡、それを操る傀儡子が燃え盛る炎の中で争う。

本来は自分の体ではない、人の体で戦う故に、その体になじんで

いる方が有利になるのは必然であつた。つい先ほどまで、光秀の体
に乗り移っていた銀閣にとって、この足輕の体で戦うのは非常に難
儀なことであつた。体の重さや手足の長さを把握しきれず、紙一重
の差で重傷は避けてはいるが、至る所に劍先がかすめ、傷だらけに
なっていく。

人の道徳と言うものを学び、さらに元々の教えであつた、乗り移
る人間への干渉は最小限にという教えもあり、銀閣としては、乗り
移っている男にこれ以上負傷を追わせるわけにはいかなかった。か
といつて、この機を逃せば、金格を討ち果たす機会は失われてしま
う。葛藤を抱えながら、銀閣は受け一方になる。

金閣の方は銀閣と対照的に、長年信長の体に入り込んでいたため、
完全に体を我がものとしており、自在にそれを操り、劍術も自分の
ものになっている。その差で、玄人と素人同然の差が生まれている。

その差を最大限に利用し、金閣は刀を振りかぶり、劍圧で銀閣を
一刀両断にしようとした。銀閣は、必死にそれを刀で受け止めた。
刃がぶつかりあつて火花が散り、びりびりとした痺れが両腕を伝わ
り、鏢迫り合いをしながら互いの顔が刀越しに最接近する。

「適当に足輕などに乗り移るから、このような不利をこうむるのだ」

「くっ、おのれ……」

銀閣とて、この展開を予想しなかつたわけではない。しかし、最
新の注意で信長に接近するお膳立てを整えた上、多くの兵の命を預
かる光秀をここまで連れてくるわけにはいかなかった。かといつて、
命が軽いから足輕を選んだわけではない。誰にも怪しまれず、ここ
に忍び込むには、誰にも気づかれずに光秀の体から出る必要があつ
た。そのため、この足輕の体に移つたわけであつたが、慣れぬ
体の上に劍術の心得があまりない男だつたようで、幼いころから劍
術を修めてきた信長の体を使い、それに馴染んでいる金閣に対して、
あまりにも分が悪かつた。

金閣は、銀閣が宿る足輕の腹を蹴飛ばして体を倒すと、大きく刀を振りかぶりとどめをさす構えに入った。

「これまでだ」

勝ち誇った金閣が言い放ったが、その一言が余計だった。戦場の兵であれば、もの言わず最短距離で相手を仕留めなければならぬ。しかし、外道になり果て、人殺しに快楽を覚え始めていた金閣は、相手を倒し命を奪う陶醉感に酔い、言わなくともよい台詞を吐いた。それが好きとなり、銀閣には最後の好機となった。

型など関係なく、ない振り構わず銀閣は刀を振り、伸び長の足を斬り払った。一念のこもった剣は技を超えた威力を発揮し、信長の足の拳を切り裂いた。足元を不意に斬られ、立っていられなくなつた信長は体勢を崩し膝をついた。逆に跳ね起きた銀閣は、渾身の力を込めて、太刀を信長の頭上に振り下ろした。刀は頭蓋骨を叩き割り、脳に達した。

金閣も銀閣も、乗り移った相手を動かすために、普段は脳に潜む。そして、相手の体の自由を意のままにして、ものを見、音を聞き、舌で味を感じ、肌で寒暖を知り、口でものを言う。それ以外では、彼らはただ潜むだけで表には出ないが、五感を使う際は体を制圧するため、その際に不思議な瞳の輝きを発する。

銀閣は刀を引き抜くと、支えを失った信長の体が大の字になって倒れ込んだ。潜んでいた脳を直撃され、金閣はその痛みも自分のものとして感知し、体内に潜んでいられなくなり、傷口から本体が這い出てきた。それは、どう見ても水にしか見えない。無色透明で形もないのだが、意思あるものの様にあちこちをすべるように移動を繰り返す。

金閣は体を失い、用意していた女の体に逃げ込もうとしたが、その前に銀閣が立ちはだかった。金閣は、すべての逃げ場を失った。そして、水の体は、寺を包む炎にじかにさらされ、次第に湯気が上がり始めた。近くの畳に火がつき、体が直接火に触れてしまい、い

よいよその体は気泡があがり、蒸発を始めた。湧きあがる泡はまるで、金閣の断末魔の様に聞こえるが、それは人の耳では聞き取れなかった。銀閣は同族の最期を見守りながら、

「迷わず、地獄とやらに行くがよい」

と、念仏のように呟いた。その言葉と共に、金閣の体は炎に包まれ、湯気となって蒸発し霧散していき、絶命した。長い務めを果たし、ほっとして力が抜けそうな銀閣であったが、この足輕の体まで燃やすわけにはいかぬし、自分達の争いに巻き込まれた女も助けなければならぬ。銀閣は刀を鞘におさめ、女の体を肩に担いで、まだ完全に火がまわってない廊下へ向かおうとした。その時、絶命したかと思われた信長が、

「人間、五十年……」

と、はつきりと口にした。

銀閣はぞっとした。金閣は確かに絶命し、この目で見届けた。となれば、そこにいるのは織田信長であるが、あの傷で生きているはずがない。銀閣は、空耳と思うとしたが、理屈で考えるようにできている頭を持つ銀閣は、納得いく理屈を得るために、そつと後ろを振り向いた。

信長の体は今も変わらず、大の字になって倒れているのだが、口だけははつきりと動いていた。恐らく、足輕の腕では金閣を高温にさらすことで体から引き出すことはできても、本体である信長を即死させるまでには至らなかったようだ。しかし、致命傷には変わらず、信長の声は今にも消え入りそうな声であった。

「人間五十年。そう思い、生きている内にできることはすべて為す。そのためには、邪魔者はすべて消さねばならなかった。構ってはおれぬ、人の命は長くはない……。それがよもや、物の怪に体を奪われ、物の怪に介錯されるとは。神仏を信じぬ、このわしが……」

「信長殿、あなたは死んではおられなかったのですか……」

「死んでおったわ。お主はわしと同じで、魂など信じまい。だが、わしは、物の怪に体を奪われたことで、魂と言うものがあると知った。……。理屈ではないな、魂だけは、今日まで生きながらえてきた。たまらぬな、物の怪の言葉を皆、わしの言葉と思い、ひれ伏した来たのだから……。銀閣と言ったな、お主、いつわしと金閣が入れ替わったことを確信した。茶器狂いだけではあるまい」

「……、比叡山の焼き打ちであります。茶器狂いはきっかけに過ぎませぬが、真の確証はあの時です。如何に目で見えるものしか信じぬお方とはいえ、信長殿は日本の本のお方。触れてはならぬものはわきまえておられると思っていました。あれは人の所業にござりませぬ。人として踏み越えてはならない一線を越えた。そう感じた時、織田信長は金閣であると確信しました」

「……、己の心を芯まで理解するものがいると、これほどまで心が安らぐものか……。わしは、神仏は信じぬが、否定はせぬ。己の目で見えぬものは信じぬが、心の中にとどめておけばそれで構わんと思っておった。わしが嫌ったのは、まつりごとへの干渉や修行を忘れ墮落し武装した僧がどもが、『仏の道』などを抜かすことに反吐が出たのだ。だが、それを知る家臣は誰もおらぬ。そして、焼き打ちを命じたのも、わしではなく物の怪であるとも気がつくものは誰一人いない……。生まれて初めて、孤独を感じたわ」

魔王を自称し、価値観を破壊して乱世を統一しようとした男の口から、孤独を言う言葉が出ようとは。勝ち続けることで恨みを買う。頂点を目指すほど、共に寄り添うものがいなくなる。物の怪に体を奪われたことだけではなく、覇道を目指す上で織田信長が常に戦い続けたのは、勝つ度に、昇り詰める度に膨れ上がる孤独だったのだ

はなかったのか。その孤独に破れないために、弱き心のためにすぎる神仏などを否定して言ったのではなからうか。いまわの言葉を聞きながら、銀閣は一人の人としての織田信長を見る思いであった。「だが、もうよい。すべて終わるのだ。……。銀閣、礼を言う。金閣と言う輩を成敗し、織田信長を救いだした男、あっぱれである。……この信長があつぱれと言うのだ、誇りに思うがいい」

「……。信長殿、お許しください。このような形でしか、奴を仕留められなかった故……」

「それこそ、是非もない事よ。わしの言葉を誇りに思え。……、最後に、そこにある茶器をここに置いてくれ。それが最期の頼みじゃ」

「茶器、でございますか」

「お主が言う土塊、よ。お主とは気が合う者同士と思うが、こればかりは理解できなんだな」

「恐れながら……」

「人を信じぬわしであった。故に、信じるものを求めた。目で見えるものであり、また心を委ねられるもの、それが茶の湯だ。……、茶道具に宿る魂、狭い空間に身を委ねる安堵、そして己と向き合える唯一の場、それが茶の湯にわしが見出したものだ。だから、茶器に狂う素ができたのやも知れぬし、金閣に付け込まれたのであろう。……、銀閣よ、今少し人の世を見てまわれ。人と言う生き物を知れ。そうすれば、お主にも風情や風流、うつくしきもの、そして魂がわかる。それを知れば、……、ふふ、人の世は面白きものと思うであらう……」

「……、面白きもの、でございますか。……、心に留めておきまする。……、では、最期の願いはこうして叶えました故、おさらばでございます」

銀閣は信長の茶道具を傍らに寄せ、部屋を後にした。かすかに信長が笑みを浮かべた様に思ったが、もうそれを確認するゆとりはない。燃え盛る寺の廊下を必死で走る。自分の命だけでははなく、乗り移っている足軽と担いでいる女の命も預かっているのだ。

炎のため、酸素が薄くなり、そのせいで体の自由が次第に利かなくなってくるが、ここで諦めるわけにはいかず、必死で足を動かす。やがて、寺に侵入したものの、火で進路を失って立ち往生している明智軍の兵士の姿が見え、銀閣はホッとして大声をあげた。

「おおい、女が倒れておったぞお。もう火が回った、中には行けん」

ここから脱出するための言葉ではあったが、織田信長と言う男の死をこれ以上汚したくはない、そんな思いが銀閣の心をよぎったためであった。

本能寺は完全の炎に包まれる。そして、魔王と恐れられた織田信長は、その炎の中へ永久に姿を消していった。

五十五年の夢

夜が明け、炎に包まれていた本能寺は、やがて日が鎮まり、くすぶつた煙があちこちから立ち上がっている。明智軍は、信長を確実に仕留めたことは間違いないのだが、その場を離れなかったのは、信長の遺体、若しくは首をあげない限り、その死を確認できないためだ。そして、その死を確かめない限りは、信長への反旗と言う行為への恐怖から逃れることもできない。

光秀がいる本陣でも、矢継ぎ早に荷とが入れ替わり立ち替わり報告に現われ、慌ただしさと混乱ぶりを物語っている。そんな中でも光秀は、落ち着きを払い、物静かに的確な指示を与えている。

「お館様の首はまだ見つからぬのか」

「はっ。全力を挙げて探しておりますが、炎が甚だ激しかった故に、難儀しております」

「本能寺にいる兵はいくら使っても構わん。何としても首をあげよ」

斎藤利光や明智秀光らは、本能寺の焼け跡に向かい、信長の遺体の搜索の指揮に当たる事となった。さらに別の兵が光秀の許に参じた。

「ご報告いたします。織田信忠殿は、二条城に移動。明智光忠、伊勢忠興殿等が追走。もうじき、ここも落とす勢いにございます」

「大義である。下がってよいぞ」

「はっ」

伝令の兵は去っていった。見渡すと、重心は光秀のいる本陣から

出払い、二名の護衛の兵がいるだけになった。光秀は、疲れ切ったように溜息をつく、その二人に、

「そちらはしばらく下がっておれ。わしは、いささか疲れ切ってしまった。しばし、一人で休みたい。席を外せ」

と、命じた。しかし、主であり、大将である光秀を一人にすることはできない相談なので、二人とも反論したいのだが、やはりあまりにも違う地位のため、言い出せずにいる。それを察した光秀は、ふっと笑いながら話しかける。

「何も、どこかに行ってしまったというのではない。しばしの間だけ、一人になって思案したい時もあるのじゃ。気を使う事も覚えよ。わしの方から声をかけるまで、少し休ませよ」

光秀にそこまで言われては、足輕に反論する余地はない。頭を下げると、後ろ髪ひかれる思いで、その場を去っていった。残された光秀は、無言でじっとその場に座っていた。やがて、視線も動かさずにゆっくりと口を開く。

「人払いは済んだ。入って参れ」

「はっ」

声ともに、陣を覆う幕をくぐって姿を現したのは、信長を討ちとった足輕・銀閣であった。銀閣は、光秀の前に座り、地に頭をこすりつける程平伏する。光秀は、銀閣に対し、まるで親しいものに話しかけるような口調で声をかけ始める。

「そこまでへり下らなくともよい。話しづらいではないか」

「いえ。明智様にはいくら頭を下げてでも足りませぬ」

「頭どころか、胴体もないではないかお主には。笑わせるでない。」

それで、どうだったのだ。お館様は討ちとれたのか」

「……、確かに」

銀閣と光秀は、互いに顔見知りの様に普通に話をしている。片や、この世のものではない異形の命、片や、織田家の有力家臣である武将。全く不可思議な組み合わせである。

「しかし、お主とは話しづらい。名などないでは、話にならぬ」

「その事でございましたら、先程、仮の名と言うことで、銀閣と言う事になりましたが」

「おお、それでよい。して、銀閣、お館様の最後はいかがであった。そして、お館様にとりついた物の怪は成敗できたのか」

「物の怪について間違いなくこの手、いや、この男の手を借りて仕留めました。炎に焼かれ、跡形もなく……。信長殿ですが、驚きました。魂はもう食われていたと思っただけなのですが、あのお方は、やはり凄まじい御仁です。魂に食いつかれ、脳天を叩き割られながらも、己の心を取り戻し、織田信長として死んで行きました」

「何と……。お館様は、まだ生きていたと」

「はい。私は、人というものをまだわかっておらぬと、痛感いたしました」

「五十五年生きてきたわしでも、人間など良くわからぬ生き物だ。人を知って時を経ていないお主にすべてわかるわけがなからう」

「いもつともにございます」

彼らは、互いに顔見知りであるところではない。銀閣が金閣を倒すこと。そして、その過程で信長を討ち果たすことを光秀が了承済みだったことを示している。果たして、彼らの間でいかなることがあったのだろうか。そして、何故、光秀は銀閣が信長も殺してしまう事を許したのか。やはり、光秀は信長に恨みを抱いていたのだろうか……。

「それにしても首尾よくいったのう。お主の助言通りだ。人を知らぬと言いながら、皆の心を読み切りおって」

「いえ、金閣の征服欲を考えれば、ここが天下を取る勝負どころと動くはず。そして、敵なしと思い、己の周りに兵を置かないという失態を気付かぬ内にしでかした。これが、織田信長公であれば、このようなことはあり得ぬこと。己の有利すら信用せず、周りを兵で固めましょう。信頼はすれども、信用はあり得ない。それがあの方」

「よう、知っておるわ。では、この本能寺はいかにして読んだ」

「天下統一の仕上げの仕事の始まりとなる毛利攻め。そのような派手の舞台を好むのは羽柴殿。となれば、お館様に是が非でもその大役をとせがみましようし、己が命じられるように立ち振る舞うのがあの方です。金閣にしてみれば、餌を与えておけば子飼いにしやすい、そのように考えたのでしょうか」

「うむ。あの男、いや、羽柴殿の性格をよく見ておったものじゃ。そして、わしが一人、お館様の許に残る様に、お主はわしの『中』で仕組み、待っておったのじゃな」

「恐れ多い事でございます」

どうやら、彼らは顔見知りどころではなく、光秀の体内に住み着き、それを互いの意思で共生し、共に行動していた。そう見て間違いはないようだ。さらに、銀閣の会話を聞けば、銀閣の助言を光秀が聞き入れていた事になる。一体、彼らの関係はいかなるものだったと言うのか。彼らの奇妙な会話は、止めとどなく続く。

「しかし、この日がくるとはな。……、わしらが会って、どれほどになる」

「かれこれ、五年でしょうか。太陽と月が上る回数で時を測らない私にとっては、詳しいことはわかりかねます」

「真に、けつたいな奴だ。そんなお主が夢枕に立った時は、さすがに驚いたわ」

「体に入るわけですから、ご挨拶をしないわけには……」

「律儀すぎるのう。御仏の後光のようなお主から、親方様の所行は、物の怪の類がとりついていると聞いた時は、心底、驚きはした。だが、納得もできたわ」

「それを聞いた時は、私の方が驚きました」

光秀は、銀閣が己の体に入り込むことを認識し、どこか許容していたらしい。神や仏を敬う当時の人であれば、形を持たずとも、神秘的な光を放ちながら語りかける銀閣のような、節度や道徳を備えた存在であれば、思わず手を合わせ、その話に聞き入るに違いない。科学の発展していない時代であれば、目には見えぬ存在、心の内なる声に信頼の念を持つのは、現代人にとっては実感するのが難しい概念なのかもしれない。もちろん、この場合は、光秀と銀閣の

双方の人格によるものが大きいのであるが。

「私には、それが未だに理解しかねるところです。何ゆえに、お館様は変わった、そのようなお考えを持ったのですか。家中の方は、命令に戸惑いを持ちこそすれ、織田信長の存在には疑念を持つておりませんでした。なぜ、殿はそこに気がつかれたのでしょうか」

「人をどうも理解し切れておらぬお主に、どう伝えればよいのやら。まあ、わしが惚れた織田信長と言う人物が、いつの間にか姿を消していた、いや、死んでいたと、どこかで気がついていたらからであるうな」

「惚れていた、と。それは、若衆道のようなものでございますか」

若衆道とは、現代は衆道と呼ばれているもので、いわゆる男色、同性愛の事である。現代では、タブー視され、その存在を認めるか認めないかで問題になるものであるが、明治以前の江戸時代中期ごろまでの日本では、決して後ろめたいことではなく、「ある」物として普通に認識されているものだった。

光秀が信長に対して男惚れするという言葉を発した事に、現代の人間であればその意味を察する事に障害はないが、戦国時代の価値観のもと、さらに人と言う者の道徳や文化を理解しきれていない銀閣にとつて、光秀の言葉を額面通りに受け取ってしまうのは、いわゆるものをみる尺度が違う故の仕方ない事であった。そんな銀閣の自然な態度での誤解に、光秀は笑い声をあげながら、にこやかに話を続ける。とても、本能寺の変と言う大事件を起こした明智軍の大将には見えない姿がそこにあった。

「若衆道は良かったな。まあ、お主が理解できぬも無理はない。惚れると言うのは、その人物の度量、人となりに心酔し、その人物に己の命や命運を預けても構わないと思う事だ。忠義とはまた違う、一人の男の感情としてだ。わかるか」

「おぼろげながら」

「それでよい。それなら、わしがお館様を討つと心に決め、お主に体と命を預けた理由がわかるう」

「明智殿が惚れた織田信長は既に死に、目の前にいるのは織田信長の名を語る偽物。それ故に」

「そうじゃ。織田信長と言う人物は特異な人である。古く錆びついた物を壊す度胸がありながら、金の流れに敏感で、新しきものを自分の血肉とし、茶道と言う目に見えぬ何を見つめる物をたしなむ風流人でもある。様々な顔を持つ、型にはまらぬ異端の男。わしがそれまでに仕えたどんな人物より、複雑で、魅力的で、理解しがたい人物であつた」

「理解できない人物に、命と命運を預けられるのですか」

「銀閣、わしはお館様に使える前にも、何人かの主に仕えていた。だがな、どうもすぐに底が知れてしまい、つまらぬのじゃ。次にすべき事、何を考えているか、おおよその見当がつくのだ。だが、お館様は、わしの思惑を超えた事をしてのける。言葉にする。自分の思惑を超える者に面白さを感じる。それが人という者の面白き、そして不可思議な性よ」

「どうもわかりません。私は、相手の事をきつちりと調べ上げ、知り尽くしてからでないと怖くて仕方ありません」

「お主は有能だ。だが、有能故に遊びが足りぬ。枠から外れることに不安、罪を感じる。だから知らぬものに触れることを恐れるのだ。」

わしにもそういう性分があるから、なおさらよくわかる」

「それ故に、この謀反を我々の間で話し合い、明智殿が兵を動かし、私が知恵を授ける。このような行きの合う行動を可能にし、話が宿敵を討つ事ができました。では、明智様は何を叶えたのでございましょう」

銀閣の問いに対し、光秀は竹筒に入っている水をごくりと飲み込み、喉の渴きをいやすと、銀閣にも飲めと勧めた。銀閣は、特に水を必要とは思わないのだが、考えてみれば、足輕に乗り移ってから、激しい斬り合いとを行い、炎の中を走り抜けるなど、だいぶこの男に負担をかけている事を思い出し、乗り移っている男のために水を呑んだ。水の冷たさが、男の感覚を通して銀閣に伝わり、足輕の体が、よほど水分を欲していたのだと、この後に及んで気がつく始末に、これでは自分も金閣と変わりはないではないかと、己を戒める。銀閣が、水を飲み干すのを見届けると、光秀は、話の続きを語り始める。

「わしが叶えたものと言ったな。それは、織田信長を語るものをお主が討つことで、お館様を織田信長として死なせて差し上げる事じや」

「良く意味がわかりませぬが……」

「お前は、お館様がどこかで、他の誰かに変わってしまった事に気がついた。わしも、おぼろげながらそれを感じ取り、お主と出会って確信を抱いたのだ。自分が新そっこ惚れて、命をかけて仕えようとした方はもういない。そこにいるのは、織田信長を騙り、その皮をかぶって非道を重ねる外道である何者。許せなかった。あれほどのお方の名を騙って残虐非道の限りを尽くし、茶器に狂って国の乱れを招く。真のお館様であれば、あれほど馬鹿げたことはせぬ。だ

から、紛いものの織田信長を討つことで、真のおあだ信長の魂をお助けしたかったのじゃ」

「では、私が信長公を討つたのは、本意ではござりませんでしたか」

「いや、あれで良いのじゃ。お館様は、恥辱にまみれたまま、残りの人生を歩むほど、生きる事に未練を覚える方ではない。人間五十年。その半ばでもものけに取りつかれてしまったものの、それも人生と割り切られたであろう。今さら助かった所で、己のものではなくなつた人生を享受するとは思えぬ。だから、わしは思うのじゃ。お主のおかげで、織田信長として最期を迎えた事に、お館様もお主を褒めて下さるであろう。『銀閣、あつぱれな奴じゃ』とな。わしも、感謝するぞ。わしが憧れ、惚れぬき、敬い続けた織田信長公を救つてくれた事を」

「……、あ、ありがたきお言葉でございます」

銀閣は、目のない自分の眼がしらが熱くなり、涙が出るの感じた。驚くべきことだった。顔も体もない自分が、涙を流す感情と感覚を得るなど、あり得ないからだ。だが、器としている男の目を通し、銀閣の感情が伝わり、男の目に涙を流させた。それは、銀閣が人が涙する心を、己の感覚で理解した瞬間である。

銀閣は、金閣を討つた時の光景が、いつまでも心に焼き付いていた。金閣を討ち果たした事はいい。だが、信長の頭を切りつけた感触、傷口から流れる血、そして、死の間際の信長との会話と炎に消えていくその体。それを思うと、自分は大義名分とはいえ、金閣と同様、人間を言い様に利用し、命まで奪つたのではないかという罪悪感を拭えぬずにいた。だが、信長の声を代弁してくれた光秀の言葉に、僅かながらではあるが、銀閣の心は救われたのだ。そして、人と言うものがどのような心を持っているのかを、『読む』のでは

なく、心で『感じる』事が出来た瞬間であつた。

むせび泣き、頭を地面にこすりつけながら平伏する銀閣に、光秀は穏やかに語りかけてくる。

「大の男が泣くでない。お主に体を貸している男の恥になる」

「そ、そうでございました。殿、私からお願いがございます」

「何じゃ、申してみよ」

「殿の目と耳を通して得た織田家かしの皆さまの氣象や考え方を見ますに、これを好機ととらえ、織田家で力を増そうと考える者は多数おります。ですが、織田家どころか、信長公の成し遂げた事を足掛かりにして、天下を己の手におさめようとする、果てなき野望を持つ者がおります」

「天下を己の手に、か。わしなどには到底及びもつかぬ大きな野望じゃな。その者は誰じゃ」

「羽柴筑前守秀吉殿。あの方は、信長殿に忠義を尽くしておりますが、それは出世を叶えて下さる織田信長だからこそ仕えている。あの方の目は、殿とは違い、常にギラギラしております。私など、秀吉殿が金閣ではないかと思つたほどでございます」

「なるほど。確かに、お主の仇である金閣に良く似ておるな。わしは、天下を狙うと言う大きな野望を持つとしたら、徳川殿と考えていた」

「あの方は、未熟な私にはよくわからぬお方です。わからぬ故に怖いのでござりますが、秀吉殿の心に秘めたる炎の前に怯んでしまうかもしれませぬ」

「お主、人と言うものを知るには、いい筋をしているかもしれぬぞ。では、お主の願いとは何じゃ」

「信長公を討った殿を討てば、織田家で名を上げられる。そのように考える輩が大勢おります。ですが、そのような方々に、悪名をかぶってまで信長公への忠義を果たした殿が討ち滅ぼされるなど、到底我慢できません。ですから、今一度、殿の体に戻り、殿と共に戦いとうござりまする。私の浅はかではございますが、有益な知恵がござりましたら、如何様にでも使って構いませぬ。例え勝てぬとも、明智光秀と言うお方と共に果てるのなら、この銀閣、本望であると断言できます」

人ではないはずの銀閣が、光秀と共に果てようと言う覚悟を持つ。奇妙なことではある。信長からも、光秀からも、そして己自身すらも、人と言うものを理解していないと指摘される銀閣が、ここにきて忠義と言う、ともすれば現代人でも理解しきれない思いに身を任せ、その思いを口に出しているのだ。もしかしたら、それは、歴史に名を残す事になる二人の武将との出会いが、銀閣に思いもよらぬ変化を促した結果だったのかもしれない。心と言う、目に見えぬが確実に存在するものを、理屈でしかものを考えることができなかった銀閣が、理解できなくとも感じるようになるように変えられたためだろうか。

そんな銀閣に、温かい笑みを向けた光秀は、穏やかな口調ではっきりと言った。

「それはならぬ」

「何故でございますか」

「わしには勝ち目はあるまい。だが、明智光秀と言う名を後世に残

す晴れの舞台じゃ。あの織田信長を一夜にして打ち滅ぼした明智光秀。痛快ではないか。お館様への思いは、この胸に抱いておくだけ良い。五十五年の間、この世で生きてまいった。何のための人生だったかと思う。だが、思い返してみれば、何かを成し遂げ、生きた証を残したい。そんな夢を持ってこの日まで来た。一家臣として生きる道もあつた。だが、それではわしと言う人間がいたと言う事にしかならぬ。だが、今この日から、明智光秀の名はこの国が続く限り残るであろう。忠義を果たし、己の夢も叶えた。思い残す事のない、晴れ晴れとした気分じゃ。だから、この晴れ舞台を誰にも邪魔されとうはないのだ。銀閣、例えば友であるお主であつてもな」

「私が、友でございますか」

「おお、そうじゃ。お主はわしの友じゃ。お主が人であれば、主君と家臣の間で合つたであろうが、人ではないお主にそのような関係は無用じゃ。お主との関係はわしが決める。お主はわしの友じゃ。そして、お主にとつてもわしは友と言えるであろう。五分と五分の間柄じゃ」

「も、勿体のうございます……」

「だから、泣くでないと云つておる。涙もろい物の怪など聞いた事がない。銀閣、友の願いを聞いてくれ。わしの最後の舞台、一世一代の舞を舞わせてくれ。この通りじゃ、頼む。わしの五十五年の夢の最後を飾らさて欲しいのじゃ」

「……。わかりました。ですが、私にできることは、何かございませんか。これも、友の願いでございます」

「おお、そうじゃ。それでこそ、友だ。まず一つ。その男を里に返

してやってくれ。恐らく、この後の戦では明智軍は助かることはないであろう。そんな中でも、家臣たちはわしのために命を捨てる。それを思うと、何とも殿様と言うものは、因果なものじゃ。多くの人の命を散らせてしまい、そして、散らせてきたこのわしからの願いは、我らのために働いてくれたその男を、無事に親兄弟、女房子供のいる里に送り届けてくれ。多くの人を死なせ、この後も死なせるわしのせめてもの善行だ。お主なら、簡単な事であろう」

「わかりました。確かに、この器となった男は、里に送り届けます」
「もう一つの願いは、……。銀閣よ、もう少し、この世を生きてみよう」

光秀の意外な願いに、銀閣は言葉を失った。器の男を送り届けた後の事を、彼は考えていなかった。この国来る時に出たゴアと言う所に向かう術もない。語り合える者もない。それなら、いっそ消えてしまった方がいいとさえ思っていたからだ。所詮、人の世では自分は物の怪、相容れぬ存在でしかない。存在を認められないなら、そんな世の中で生きていくより、消えて方がましかもしれない。日差しに本体をさらせば、あっと干からびて事が済む。炎に巻かれて消えた金閣の様に。そんな破滅的な事を考えていた銀閣に、光秀が願った事は、生き延びると言うものだった。

「お主は、しばし、この世の中を見てまわれ。人の事をよく知らぬと言いながら、しっかり学んで居るではないか。ならば、もう少し、心を学んでみよ。心を読むのではない。一体になって、同じものを見て感じるようになるまで生きてみよ。そんなお主の姿が楽しみでならぬ。そして、心を知った時、お主は人が面白くて仕方なくなり、生きることが楽しくなる。わしは、そのようにお主を育ててみたくなかった」

「何とも……。意外なお言葉に、何と返事をして良いものやら」

「友の願いじゃ。嫌とは言わせぬ。わしも多くの命奪い、物を壊してきた。だから、最後に何かを生み、育ててみたいのだ。自分の子供とは違う何か。人の世に、人ではない命を生む痛快な思いをしてみたい。そして、お主が人の世をどのように生きていくのか考える楽しさを抱きたいのじゃ」

「参りましたな……。ですが、友の願いにござります。約束いたしましょう。この銀閣、この体が朽ち果てるまで、人の世と人の心を学びます。そして、楽しんで見せましょう」

「うむ、それでよい。できれば、今より変わったお主に会いたいものじゃがな。それは来世かもしれぬのが、心残りじゃ」

「私も、いつまで生きるのか、とんと見当もつきませぬ。もしかしたら、来世でお会いするかもしれませぬ。ですが、万が一、殿が生き延びることがありましたら、……、再び会いましょう。死ぬために戦うのはおやめ下され」

「友の願いだ、約束しよう。さあ、他の者に気付かれる前に、本能寺を離れよ。そして、その男を無事に送り届けるのじゃぞ」

銀閣は、深々と頭を下げると、光秀の本陣から出ていった。まだ喧騒の中にある本能寺を離れ、銀閣は男の体を彼の故郷に送り届けるため、今日を脱出した。友である、光秀の願いをかなえるために。

天正十三年六月十三日。天王山の麓の山崎にて、明智光秀の軍と、中国地方より十日の強行軍で引き返してきた羽柴秀吉との戦いが始

まった。だが、瞳の奥に秘めた野心の炎を解き放った秀吉は、すべての兵力も人心も運も引き寄せ、明智軍を打ち破った。三日天下と言われる程のあっけない明智軍の敗北は、既に最期を悟り、受け入れていたかにすら思えるもろさである。

明智光秀は、敗走する途中にて、落ち武者狩りの手で討たれたと伝えられる……。

暁の空

慶長13年、駿府城

駿府に移り住み、將軍の座を息子である秀忠に譲ってから、徳川家康は自らが起こした江戸幕府体制を盤石のものとするべく、大御所として今なお政治の中心に座っている。息子に託した家臣とは別に、自分の家臣を抱えながら政治に、軍事に、謀に、未だ邁進する家康であつたが、その日はことのほか上機嫌であつた。

政務に追われる毎日の中で、この日は家康がことのほか楽しみにしていたある人物との面会があり、家臣も戸惑いを覚えるほど、朝から家康の顔には笑みが浮かぶほどに、機嫌がいいのだ。面会の時間が訪れ、家康は広間にはいつて上座に座つた。家臣たちも、下座に列席し、家康の客人を迎える準備を整える。やがて、広間に案内されて一人の老人が通されてきた。

老人は法衣を来た僧であつた。着物からもかなり位の高い高僧だと言う事がわかる。広間に通され、家康の正面に座つた老僧は、畳の上で深々と頭を下げ、家臣によつて名を家康に告げられる。

「こちらにおられますが、南光坊天海様ににございます」

自らの名を紹介された天海を頭を上げる。その時、家康と目が合い、何とも言えぬ不思議な表情を一瞬浮かべたが、それは家康以外誰の間にも入らなかつたであろう。いや、目にした所で、その意味を理解する者はいまい。

天海の顔を見た家康は、にやりと口元を緩ませ、いつになく上機嫌な口調で喋り出す。

「天海殿、よく参られた。そなたからの書状、しかと目を通し、わたしも思わず感服した。出来る事なら、もう数年早く会いたかつたものじゃ。いやいや、よく参られた」

余りに上機嫌で饒舌な家康の口調に、家臣たちは思わず目をみは

る思いだった。普段の家康は、聞く耳は持っているが、あまり口数が多い方とは言えず、喋るよりは聞く、聞いたうえでようやく重い口を開く性質だからだ。天海のように高名な人物と面会した時であっても、初対面であれば最初は押し黙り、相手の人と練り、話し方や癖を観察し、どのような人物かを推し量つてようやく口を開くのが常であった。それ故に、出会う人々が本心を読む事ができず、家康自身も明かさない性格をして「タヌキ親父」と言われる所以である。そのように、相手に自分の手の打ちや本心を簡単には出さない家康が、今日会ったばかりの展開に、こうまで親しげに話しかけることは、家臣にとっては驚くべきことであり、摩訶不思議と言っている事であった。そして、天海もまた、時の事実上の最高権力者である、大御所の家康に全く臆する事も、へりくだる事もなく、見る人が見れば少々無礼に見える程、くだけた様子の口調で話している。「いえいえ、こちらから、大御所様にお目通り願いたいとお頼みしたのです。願いを叶えていただきありがとうございます。ですが、大御所様、顔色はよろしい様ですが、少々肥えておられますな」「そうかの。鷹狩りなどをして体を動かしてはおるのだが、やはり腹が出ているのはわかるか。家臣どもは、そういう事は言ってくれぬ」

「太り過ぎはよくありません。それと、薬にも凝っておられるようですが、程々に。漢方は奥が深い故、薬の調合だけでは、生兵法になりかねませぬ」

「いやいや、これは恐れ入った」

家康は、近年になって肥え出した腹を叩きながら、実に愉快だと言わんばかりに、口を開けて笑っている。普段であれば、余りにも自家製の薬に拘る家康に意思が意見を述べようとすると、烈火のごとく怒る家康が、僧である天海に戒めらると、こうも簡単に自分の行為の非を認めてしまう事に、家臣は目を丸くし、ざわざわと騒ぎ立てる程、驚愕している。それほど、彼らの目の前で起こっている事が、信じ難いものである事が、その反応でわかったというものだ。

だが、家康は、その驚きにさらに拍車をかける様な事を口にした。

「お主達、ちと席を外せ。天海殿と二人きりで話がしたい」

家臣たちは、もうざわつくどころではなく、うろたえてしまった。大御所と言う天下の最高権力者を、いましたがた会ったばかりの人間と二人きりにするなどあり得ない事であった。いくら老体の高僧とは言え、前例のない家康の要求に、誰一人としてすぐに同意の返事を返す事が出来ずにいる。しかし、誰かが意見を言わねばならず、家康の懐刀と言える存在の本多正純が、波風立たぬように家康に伺いを立てる。

「大御所様。席を外せと言われるは、この場にいる皆でござい
ますか」

「そうじゃ。だから、お主達と言ったのじゃ。わしの命に不服か」

「いえ、そうではござりませぬが、客人とお二人きりと言うのはい
ささか……」

「茶の湯の席でも、二人きりにもなる。安心せい、互いに爺だ。何かあつてもたかが知れている。何かあれば、わしが喚く。その時は、若いお主たちがここになだれ込めば良いだけの事。さあ、さつさと席を外せ。それとも、わしの命に従えぬか」

「いえ、そのようなことは……。では、我らは廊下に控えておりま
する故……」

「くれぐれも言うが、盗み聞きは相ならん。わしに隠し事が通用する
などと思わぬ事じゃ。わしはタヌキじゃからな。人を化かすこと
はあつても騙されはせぬから、よく覚えておけ」
「ははっ」

正純以下の家来たちは、一度決まった以上、反論はできないため、もの言わずに退室し、静かに広間の障子が閉められた。そして、人の気配が完全に消えるまで押し黙っていた二人だが、完全に人の気配が消えると、家康は満面の笑みを浮かべながら立ち上がり、自らしも座に降りて天海の隣にあぐらをかいて、どっかと座りこみ、ニヤニヤした口調で天海に話しかけた。先程までの敬意を持った節度

ある姿勢とは、全く違う態度だ。

「いやはや、久しぶりでございます。しかし、書状を見た時は、さすがに肝を冷やしました」

そう言った瞬間、家康の目が銀色の輝きを帯びた。その目の輝きを逃さず、じつと見据えていた天海もまた、くだけた口調で家康に話しかける。これもまた、時の最高権力者に話しかける様な態度ではない。

「わしとて、お主が大御所様と一緒にいると知った時は、歳ゆえに小便を漏らしそうになったわ、銀閣よ」

天海は、げらげらと笑いながら、その名を口にした。そう、かつて明智光秀と共に本能寺の変を起こし、直接織田信長を討ちとったこの世の者にあらざる者、銀閣の名を。何と、銀閣は今、徳川家康と言う天下人の中に住み着いているのだった。大胆かつ、驚くべき事実でありながら、銀閣もまた笑いながら話を続け、さらに呆れるほど驚きの事実を口にする。

「書状の中に、銀閣の文字を見つけた時は、驚きと共に嬉しさがありましたぞ、明智殿」

「ああ、その名はもう捨てた。いや、死んだのだ。ここにいるのは天海と言う、一人の坊主じゃ」

「私も、明智、いや天海殿は山崎の合戦で死んだものと疑いもしませんでした」

銀閣は何と、天海に向かって「明智殿」と口にし、天海もそれを否定せず、談笑をしている。人払いをしたうえでなければ、このような会話など誰も信じないばかりか、老人が二人、気が触れたと受け取られかねない。銀閣が人払いをしたのはもつともなことでもあるし、かつて光秀が二人で話し合う際に見せた気配りである。今は立場を変えて、そして姿も名前を変えて逆の立場になった二人ではあるが、友としての関係は、全く変わっていない。

「お主が死んだと思うても無理はない、わしも逃走している時は、もはやこれまで。どこで腹を切るか、そればかり考えておった」

「確か、竹やぶで落ち武者狩りにあったとか……」

「うむ。半分当たっている。もう半分は嘘じゃ」

「詳しく教えて下さりませ。でないと、幽霊と話しているような気分でございます」

「お主に幽霊などと言われとうはないわ。坊主の幽霊など、始末が悪い。山崎の合戦で敗北が決し、数人の家臣と共にわしは逃げのびた。とは言っても、あてはあるわけではない。どこでどのように死ぬか、それが問題じゃった。夜の闇にまぎれて竹やぶの中を進んでいる時だ。茂みから音がし、すぐにわしは落ち武者狩りと気がついた。敗走する大将、それも織田信長を討った明智光秀と言うのは向こうも知っているのは明白だ。ああ、これまでかと覚悟したのだが、天はわしを生かしたのだ。彼らは落ち武者狩りではなかった。普通の百姓だった」

「どういう事でございますか」

「お主の仇である金閣が織田信長の名を騙り、牙をむき出したのがあの比叡山の焼き打ちの時じゃったな。あの頃のわしは、お主や金閣のような者がいるなど知る由もなかった。信長公の命だと信じて疑わなかったから、肝を冷やしたものだ。あの時、あの場で命令を受けた者全員が同じ気持ちだったろうが、理屈で論破せぬ限り、あの方は聞く耳を持たぬ。ましてや、あの時すでに金閣に入れ替わっておる。観念して、皆焼き打ちに参加した。地獄行きを覚悟したわだが、わしらはそうでも、家臣の中には信長公の恐ろしさを知らぬ大胆な者がいてな。墮落し武装した僧兵を討つのはかるうじて理解しても、関わりのない百姓や女子供を殺すなど道理に合わぬ事は出来ぬと、目を盗んでは僧兵以外は逃がしていたらしいのだ。わしの家臣だけではない。織田家の家臣の部下にはそのような者がかなりいたらしいのだ。まあ、それでもごく一部の者しか救えなんだ。だがな、その事を一生の恩と思い、いつの日にか恩返しをしようと考える律儀な者がいたのだよ」

「つまり、こういう事ですか。天海殿の家臣がこの時とばかりに京

に潜んでいたその者達に声をかけ、落ち武者狩りを装い、天海殿を救い出し、死んだと噂を流して世間をあざまういたと言う事ですな。確かあの時の首実験もろくなものではなかったはず」

銀閣の言う通り、後日、光秀の首として秀吉の本陣に数個の首が運び込まれたのだが、折からの暑さで腐敗著しく、皮まで剥がされ、判別できない状況だったと言う。他にも首の行方には色々な噂が飛び交っていたが、不思議と秀吉はその後を追わずにうやむやになっていたのを銀閣は思い出した。もしかしたら、光秀が生きている事が公になれば、それを追う事より、仕留め損なった事をその時に明らかにするのは得策ではないというださんがあったのかもしれない。「あの時も、首実験にしろ、首の行方に色々な噂が飛び交いましたが、どれが本当やら、さっぱりわかりませんでした」

「わしもあの時のことはよく思いだしとうはない。わしの身代わりになった者、振り回された家族。自分の一存で起こした事ながら、わし一人が生き残り、皆死んでしまった。やはり、腹を切ろうかとも思ったが、命懸けでわしを救ってくれた者の事を考えると、それも身勝手。それならば、頭を丸めて己のために死んだ者の冥福を祈るほかあるまい……。して、お主はわしと別れ、器となった男を無事に里へ返した後、どうしたのじゃ」

「はあ。男を里に送り届けたのはいいものの、行くあてもありませんでしたので、色々な人の体を飛び回っておりまして。ですが、やはり人と言うものを深く学びたいと思いが強くなり、まずは、信長公も、あの金閣も心酔した茶の湯と言うものを学びたいと思ひまして、一人、目星をつけました」

「お主、まさか……」

「はあ、千利休殿に」

「大胆な奴じゃ」

信長が心という不確かなものに興味を寄せ、金閣を溺れさせた茶の湯の魅力を知りたいと、銀閣が願うのはある意味自然と言える。そして、信長が茶の湯の道で唯一心酔したのが千利休ではあるが、

だからと言って、そのためにその道の大家、いや、茶の湯そのもの
と云つていい千利休に取りつくなど、天海の言う通り、あまりに大
胆な発想と行為であり、物を知らぬ銀閣だからその行動なのだろ
うが、不思議とそれは筋が通った判断でもあった。天海も、そこは
認めざるを得ない。

「して、利休殿と目や口を共にして、何がわかつたのだ」

「不思議でございました。茶の湯とは、茶を呑むただけに、なぜ
あのような仰々しい真似をするのかと理解できませんでしたが、そ
のような単純な世界ではありませんでした。茶室と言う、表の世界
から一切が切り離された空間に身を置き、己自身を無に近づける。
その過程で己自身と向き合い、茶を呑むことですべての煩惱を腹の
中に流し込み、真の己を見つめる。そのように解釈しました」
「……、まあ、それがお主の答えなら、それでよかるう。他には、
何を経験したのじゃ」

「人と言うものはわかり安く、複雑怪奇。そうとしか言えませぬ。
あの武人の誉れ高い、福島正則殿が利休殿の茶室に現われた時、最
初は威勢のよかったあの方が次第に小さくなり、気押されていくの
を見て、人と言うものは見た目とは違う一面を持っているものだ
と、ようやく実感しました。これは、威張っている人間は、己の弱さを
隠さんがために周りを威嚇する、わかりやすい物です。ですが、太
閤殿下は恐ろしいお方でした。まるで、金閣が化けて出てきたのか
と思うほど、よく似ていた」

「なるほど、殿下が金閣に似ている。面白い事を言うのう」

天海は自然と笑みがこぼれてしまう。秀吉のと付き合ってもそれな
りにあり、最も注目していた織田家家臣であっただけに、銀閣が己
の宿敵である金閣に似ていると言った事に、なるほどと思わずには
いられないからだ。両者とも野心が強く、強欲と言える性格が共通
している。さらに、その強い欲望を内に秘める事も実現のために押
し出す事の両方ができる。そして、いざ行動すれば、神がかりとも
魔物とも言えない思考と行動を見せるなど、言われてみれば本当に

よくに居るものと、天会話は思わずにいられない。

「うーむ、考えれば考える程良く似ている。お主、仇を取り逃したのではないか」

「それゆえ、化けて出てきたのだと思っただけです。ですが、人と言うものを超えていなければ、あれだけの出世を遂げ、天下を完全に掌握するなど、不可能にございましょう。僅かな時間でございましたが、太閤殿下のそばで暮らすことで、恐ろしき人となりを感じする事が出来ました」

「聞いてみたいのう、お主の目利きを」

「あのお方は、自分自身の至らぬところをよくわきまえ、あつさり認めてしまふ。これは普通の人間になかなかできぬ事。それを、人を困う事で補っていく。ただ、人を困う言葉の使い方が、魔物としか言えない魅力があります。声の質、大きさ、言いまわし、言葉の選び方。あれをやられると、もう言い逃れができない所まで引き込まれてしまふ。今も豊臣のために命を賭けるお方は、あの術にかかり腹をくくった人々のなれの果てでございましょう。豊臣の夢から覚めぬと言うより、覚ます事を拒絶しておられる」

「よくそこまで理解したものだ。今の豊臣は、お主の申す通り、栄華の夢から覚める事を拒んでおるに違いない」

「それもこれも、太閤殿下の恐ろしき器量の賜物。それを為すために、殿下は人一倍の努力を惜しまず、非常になる事も厭わなかった。額も家柄も無のあの方が唯一持っていた物は、人を見抜く力。その目を使い有能で忠疑心のある物を選んでいったおかげ。ですが、晩年に道を踏み誤ったのは、恐れが出てきたからでしょう」

「殿下は何を恐れたと」

「自分自身です。己が脅威の立身出世を思い返す度に、己のような存在が現われる事を恐れたのでしょう。その恐怖は、駆けのぼる間には内に潜んだままです。しかし、目指すべき物が亡くなった時、恐れを押さえこむものがなくなってしまう。あの方は武家の出ではない。盛者必衰と言う心を受け入れ難い物があつたが故に、いずれ衰

退していく己と豊臣家の姿を恐れたのです」

「恐れた故に、親族を殺し、朝鮮や明国への出兵に走っていたというわけか。殺されたものは哀れじゃが、恐れによって己を死なせて言った殿下も憐れなお方じゃ。そうでもしなければ、正気でいられないと思っただろうが、すでに狂気に取りつかれていた。信長公と同じかもしれぬ」

信長は、この国に生まれたが故に異端児となり、誰にも理解されずひたすら恐れられ、激しい気性に潜む孤独感をいやすために茶の湯に抛り所を求めた。そして、その心の隙を金閣に付け込まれ、生きたまま死んでいる不思議な生涯を送る事になる。秀吉は、貧しさから逃れるためにひたすら走り続け、上へ上へと駆けていった。しかし、頂に辿り着いた時、もはや昇る場所がなくなったことで、貧しさに追い付かれる恐怖を抱き、あらぬ方向へ走り始め、人の心を欠き、無意味な殺戮に走っていったのだ。弱い心を持った人間でありながら、異端の才能を持っているが故に抱いた孤独が、彼らを一層孤立させ、人であることから逃れねば安らぎを得られなかった点では、二人は一緒だったのだろう。

天海は愁いを帯びた目でため息をつきながら、思い口調で再び話し始める。

「天賦の才能を持つと言うのは、幸福と言うより、重荷なのじゃな。己如きが天下をとれるものではなかった事が、お主の話を聞いてよくわかる。だが、銀閣。お主は利休殿に憑いて、様々な事を学んでいたのだろう。利休殿は、太閤殿下より切腹を命じられたはず。その時、どうしたのだ。そして、何があった」

「まあ、あの時はここで死ぬのも運命と受け入れるか、もう少し、夜を流れて人を学ばか迷いましたが、利休殿を通してみた世の中と言ったものが、少しだけ美しいと思うようになりました。それまでは美しいと言う事自体がわからなかったのですが、ただの花一輪の美しさをどうすれば際立たせるか、そのような考え方をなさる利休殿に憑いたのは、幸運でした。ただ、あのお方は自分の死すら茶の湯

の美として取り入れられた。そうすると、私にも理解できませぬ。天海殿が、己の最期の晴れ舞台を汚されたくはないという言葉にもつながるものかと思ったのですが」

「わしの場合はただの意地じゃ。だが、利休殿の場合は、人が美しさを見いだせず、権力闘争の果てに消えていく自分の命を、その散り際をもつて、人の持つ美しさとして輝かせたのだろう。そして、己の茶の湯のなんたるかを、世の中に、いや、太閤殿下に叫んだのではないか」

「私にはわかりませぬ。その事を利休様に告げました。何故に、美しさのために命をかけるのかと」

「何と、お主に応えられた」

「これはわたくしだけの答え。銀閣はんも自分で学びなはれ。そうすれば、この世が面白くなります。このような事を申されました。正直、千利休頭いう方と一緒に時を過ぎても、茶碗を土塊としか思えぬ私があります。学んでも、己の答えを出していなことの証でございましょう」

「なるほどな。他人の答えはその人物だけの答え。だから、己だけの答えを出さねばならぬ。わしも同意する。どんな理屈を講釈されても、それを己のものとして答えを導き出さねば、まことの答えなど出ぬな。しかし、何故利休殿の次は大御所様を器に選んだのだ」

「よくわからぬお方だからです。正室や嫡男を信長公によって死に追い込まれても、領地替えによって、先祖代々の土地を失っても、不満を顔に出さず、元々目下であつた太閤殿下にあつさりと頭を下げる事も辞さず。互角に戦える実力も器量もありながらです。このようなお方と一緒につけば、人の心という摩訶不思議な物の一端をもつと学べるのではないかと思いましたが、いささか難しい事がございまして……」

「なんじゃ、それは」

「あの関ヶ原での戦の前に、大御所様は病を得ておりました。腹に小さな腫物が」

「なんと……」

家康が、自身の健康のために様々な工夫をしている事は、天海が明智光秀であった頃から耳にしていた事である。武芸を戦のためだけにではなく心身を鍛える者としても己に貸し、周りにも奨励したり、体を動かし、領内を見回る一石二鳥を図った鷹狩り、医師の話や聞かない短所はある物の、自身で様々な薬を調合する研究熱心な点は、家康自身が、信長や秀吉にあつて己にないものをはつきりと認識していたが故に、自分自身より徳川が生き残るには、彼らより先に死んではならないと言う信念があつたからである。事実、秀吉よりも長明を実現させた家康は、時代の流れを読み取り、豊臣の臣下から、征夷大將軍となつて徳川と豊臣の地位を逆転させてしまった。それだけに、家康がそれほど早くに病を得ていた事が、天海には信じられなかったのだ。

「あれほど、体に気を使つておられたお方が、何と皮肉な」

「私も、大御所と共に暮らして間もないころでしたが、驚きました。このお方は少し変わつておられましたまして、夢の中でご挨拶した折に、自分の体でものを学ぶのは一向に構わんが、わしにもものを教えると言つのです。人間、ものを知らぬより知つておいた方が宝を見つけやすい。人でないお前に物を教わるなど、天下のどこを探してもそんな人間はおらぬ、と」

「大御所様も変わったお方じゃ。そんなお方に目星をつけるお主の眼力は恐ろしい」

「いえいえ。そうして、私がこの人の世に流れ着いてからの出来事、金閣との戦い、明智殿とのやり取り、利休殿の目から見ると、豊臣家の様子など、私の目から通し菅あげた事をお話ししました。とりとめのない事にも、実に面白そうに聞いて下さるので、眠るのを忘れてしまうほどでした。ただ、ある日、とり憑いている大御所の体に妙な気配を覚えまして、色々探つてみたところ、胃の腑に小さなできものができていたのです」

「大御所様には、すぐに伝えたのか」

「迷いましたが、体の中でお世話になっている身ゆえ、お知らせしました。とても気落ちしておられた様子でしたが、突然妙な事を言いだされたのです。私がとり憑いてからと言うものの、大御所様は自分の目や耳が若い頃のようによく利くようになり、馬に乗ってもさほど疲れなくなつたと。どうも、私のとり憑いた人間は、体に精力を蘇らせるらしいのです」

「なんと……。いや、それでか」

最初は驚いていた天海であつたが、何か思い当たる節があるらしく、手をぽんと叩き、心当たりを口にする。

「わしも妙じやと思つていた。七十などとづくに越しているにも関わらず、目はよく見え、耳ははつきり聞こえ、拳句の果てには小便も糞も毎日きつちり出る。不思議なものだと思つていたが、お主と一緒に過ごしたことで、わしの体にも精をもたらされたのかもしれない」

「そのような事など、夢に思いませんでした。ですが、大御所様はそれを見抜いたようでした。そして、私にこう申されました。『徳川家はいまだ安泰とは言えぬ。わしの家は、代々大国の間で翻弄され、わしの大になつても織田家や豊臣家によつて刃を喉元に突きつけられておる。わしは、その刃を取り去りたい。その好機も巡つてきた。だからこそ、死ぬわけにはいかん。だから、わしに時をよこせ。徳川の世を安泰とするために、お主の力で、わしの病が大きくなるのを押さえこむのじゃ』と。世話になつて身ゆえ、断る事も出来ず、今日まで至つてゐる次第であります」

「大役を任されたのう。考えてみれば、江戸幕府はお主でもつていゝ様なものではないか」

「ですが、もう時がございません。大御所様の寿命も、病のため風前の灯でございます。こればかりは、自然の理です、私にはどうする事も出来ません」

事実、家康は慶長二十年にこの世を去る。銀閣の言う様に、それほど時は残されていない。しかし、黎明期の幕府は、未だ豊臣家は

健在し、諸大名の力も強く、未だ武力の時代の残り火がくすぶっている。家康の後継者である秀忠は、政治という大局的な流れの中で決断を下すのには向いているが、瞬時に状況が変わっていく戦と言うものにおいては、百戦錬磨の家康とは雲泥の差がある。それは凡庸という問題ではなく、生きてきた時代と持つて生まれた才能の質の違いである。

そして、そのようなまだ不安定な時代であるからこそ、優れた政治家になるであろう秀忠に、武人である家康が戦国の世を完全に終わらせて、天下を譲り渡したいというのは、情と言うより実に理にかなった冷静な判断と言える。その最後の事業を成し遂げるには、家康に残された事業はあまりにも短いのだ。

「なるほど。老い先短いにも関わらず、大御所様に残された務めは余りにも大きいということか。もしかして、お主はわしを呼び寄せたのはそれが理由か」

「はい。大御所様の命を永らえさせると言う私の務めは、もうすぐ終わります。ですが、大御所様は、自分が去った後の幕府、徳川家の事も心配しておられます。武人である年寄りの時代ではない。かといって、若い者は苦勞を知らない。それ故に、年齢と経験を重ねた知恵袋が必要だと、大御所様は申されております。それは私も同意いたします。織田家や徳川家の盛衰を見てきた人ではない私は、言いづらい事をはつきり言える立場です。人が生きていくには、若き力と年寄りの知恵と経験が必須でございます」

「何故、わしを推挙したのだ。わしはただ、友であるお主に会いたかっただけなのだな」

「そのようなお人柄であるからです。礼節を重んじながら、一対一人と人との関わりを大事にして下さる。知略に長け、風流も知っている。そして何より、人の世の裏表、勝者と敗者、人の心の有様を知っておられる方は明智光秀を置いて他にはおりませぬ。そう大御所に申し上げた所、あの明智光秀であれば間違いないであろう」「謀反者のわしがか」

「『謀反であれば、もつとうまくやる。あれは気がふれたか、信長公の狂気を止める事が真の目的だったのだろう。でなければ、あの人物がああもあっさり負けるはずがない』、大御所様はそう申されました。そして、大御所様宛を装い私に宛てた書状を見て、明智光秀が生きている事を知り、天海殿の正体を大御所様にお伝えした上で推挙し、このような場を設けさせていただきました」

「お主もやるのう。大御所様に似てきたようじゃ」

天海は、家康と銀閣の思惑に、苦笑いを浮かべながら、自分の身の振り方をどうするべきか考えていた。一度は、あえて世の流れに逆らって己の思いのままに行動し、流れから弾き出された身。己の決断で命を落とした物の事を思い、残りの人生を弔いのために使おうかと考えていた所、彼が巡り合ったのは、天下のために力を貸せと言う思いがけない言葉。重い過去と、為すべき事がある未来の間で、彼の心は揺れ動いた。長い沈黙の後、天海はゆっくりと口を開く。

「よろしい。引き受けよう。わしの行いを天下を取るためと思い、死んでいった家族や家臣のために弔ってきたが、近頃は天下に口出しすることで彼らの思いを遂げる事もできるのではないかと、思い始めていた所。それを、天下の大御所様のお墨付きとあらば、堂々とする事ができる。世を渡ってきたわしの経験、知恵、すべてを使って子の天下をの為に尽くそう。この天海、大御所様のためにすべてを捧げます」

天海は家康に向かって深々と頭を下げた。家康の眼の色はまだまだ銀色に輝いているが、家康の心もまた天海の返事を聞き満足したのか、その頬がわずかに緩んだ。恐らくそれは、銀閣の意思とは関係のない反応に違いなかった。

銀閣もまた、天海の返事に安心したのか、ホッと息を突き、安堵の表情を浮かべている。

「いやあ、これで私も大御所様への御恩も返せます。後は、その日が来るまで大御所様の体と共に生きるのみでございます。何とか、

豊臣家への処遇が決まるまではと考えておられるようです」

「わしからも、存続か廃絶か、それが天下のために何がいいのかを
考えながら、助言する事になるであろう」

「ありがとうございます。ですが、天海殿。何故に、私が大御所様
と一緒に気がつかれたのですか」

「ん、それか」

天海は、銀閣の問いにしばらく無言で考えた後、こう答えた。

「お主がもつと人を学べば、わかるかもしれぬな」

そう言つと、天海は銀閣を煙に巻いてしまった。それ以後も、そ
の答えを彼自ら銀閣に教えた事は、一度足りもない。

天正十五年、徳川家康は七十五歳でこの世を去つた。しかし、そ
の際に、彼の体から不思議な水が流れ出たという話は聞かれない。
水の体を持つもののけ・銀閣は、それつきり行方をくらませてしま
つたが、風の噂と言うべきか、歴史の中に小さな影は残したらしい。
ある時は、日本を回りながらその美しさを歌う風流人に、ある時は
この国の歴史を記すことに生涯かけた人物に、ある時は正体不明で
ありながら歴史に名を残す画家に、彼の影を見た者がいると言つが、
歴史の中にその噂は埋もれてしまい、その真意を確かめることはも
はやできない。

銀閣がいつまで生きたのか、いや、今も生きているのかは誰も知
らない。世界の誰かと共に生き、人の世と心を学んでいるのかもし
れない。どこかで銀色の目を輝かせる人がいるとしたら、それは誰
なのか。これを読むあなたかもしれない。それとも、これを書いて
いる私なのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7417x/>

傀儡と傀儡子

2011年12月24日18時50分発行